

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十六年六月二十五日 印刷
昭和四十六年七月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五三〇号



No. 530

七月号

大会 柳川忌回七郎生麻

時 日 昭和46年7月11日（日）午後1時開場

会場 御堂会館（南御堂）

電話二五一・五八二〇番

大阪市東区北久太郎町四一六八

（地下鉄本町駅南出口から南へ二百米）

司会

開会の辞

挨拶

同

故麻生路郎先生七回忌法要

講演

兼題と選者

麻生

路

幸

七

塔

（各題三句以内・席題はありません）

◇当日出席者も七月一日着便でご送付ください。

閉会の辞

会費

◇記念品

偲ぶ会

出席者に謹呈

千円。会場内食堂で懇親宴

川村好郎

中島生々庵

近江砂人

岡橋宣介

三井東洋樹

増井不二也

福永清造

堀口塊人

麻生葭乃

中島生々庵

若本多志

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

西尾栗

主 催 川 柳 塔 社

電話二七一・三九八五番

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストア

媒妁人絵にもならない肩がこり
神前に眉ととのえて相対す
個性塗りつぶし花嫁渦に佇ち
嬉し涙つけまつげにささえられ
空港に花嫁としてのミニ姿

中島生々庵



忌郎路

路郎先生ご逝去から満六年が、あつという間に過ぎて終った。文字通り鳥兔勿々である。今度七回忌の法要を営むに際して、洵に忸怩たるものを禁じ得ないのである。「目を閉じよ、そしたらそこにおまえが見えるだろう」と西哲の言葉を思い出す。今私が目を閉じてみて、瞼の裏に去来するものは、するどい中にも慈眼は涼しく、静かに印相を結んで見つめて居られる尊い如来像である。幽明こそ境を異にしているが一瞬たりとも私達の身辺を離れず、暖かく包んで頂く慈眼である。「天才にとっては生も死も同じことである」

とのトルストイの言葉を今こそしみじみ肌で感じさせられるのである。ご生前「燕雀なんぞ鴻鵠の志を知らんや」の意気天を衡いて燃え立ったご信念が今なお八方世界にお示しになっているお姿である。さらば不徳菲才のわれ等何をもってこれにお応えすべきであろうか。徒らに大を望んで身の程を忘れず一事一事を怠らず、ひたすらに歩み続けてゆく精進こそ私達に与えられた道である。そしてそれが必ずや永久に照し導いて下さる唯一の道であると私は確く信ずる者である。

川柳塔七月号目次

路郎忌

川柳塔：(同人作品)

路郎先生の追憶

川柳初篇研究：(九十六)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「句の生命」について：(中)

近作柳樽

秀句鑑賞

：(同人吟)
：(近作柳樽)

「旅人」以後の麻生路郎作品：(10)

二賞中間発表

近詠

座右の句

年下と寄り添うてゆく傘の内

(路郎)

私の句

雨やどり老いて旅路のものの思い

岸南柳

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

中島生々庵選：(1)

中島生々庵選：(4)

若本多久志：(2)

北川春巢：(24)

川村好郎選：(30)

浜田久米雄：(26)

若本多久志：(27)

傍島静馬：(22)

近詠：(39)

二賞中間発表：(28)

近詠：(51)

路郎先生の追憶

若本多久志

「いのちある句を創れ」これは私は大正十三年に、川柳の社会化と初心者指導及び、川柳の研究を目標に「川柳雑誌」を刊行して以来、今日まで叫び続けてきた言葉であり、それによって育まれてきた多くの作家は、この言葉を金科玉条として、ひたむきに作句を続けてきた、従って多くの名作家を輩出したことはいままでもない……以下略」

これは昭和三十一年一月刊行された。不朽洞門下二百数十名の句集「私達」に、路郎先生が書かれた序文の一節である。

私もこの言葉通り「いのちある句」をとひたすら精進をつづけてきたにも拘らず、名作家ならぬ迷作家で終りそうなのは、地下の先生に対しまことに申し訳のないことと思っている。

憶えば私が路郎先生に初めてお目にかかり、しみじみお話を承ったのは昭和二十三年五月、先生が漂然と安川久流美さんを訪ねて来られた時、当時川稚金沢支部になっていた

川柳五十三次……(十)	富士野鞍馬……(46)
キリストの……	高鷲亜鈍……(25)
きのう・きょう……	本多柳志……(39)
路郎先生の手紙……	東野大八……(40)
路郎師の遺志……	戸田古方……(42)
松に従いそろかしこ……	不二田一三夫……(43)
雅号ぶっちゃけばなし……	本多柳志……(63)
初歩教室……	本田恵二朗……(50)
大萬川柳「次の間」……	川村好郎選……(52)
川柳家の曆……(七月生まれの人)……遺稿	清水白柳……(56)
柳界展望……	(薫風)……(54)
本社六月句会……	(庸佑)……(57)
各地柳壇……	(文秋)……(60)
一路集「手さぐり」……	高橋鬼焼選……(48)
「女難」……	仲どんたく選……(47)
青……	大森娛句楽選……(48)
編集後記……	(一三夫・葉子)……(65)

座右の句

ふるくとも僕には仁義礼智信

私の句

月へ行く時代なれども神詣で

(路郎)

木村水洞

「魚安」——西本三笑民宅——で、浅酌低唱、三人で一升瓶を三本も空けての快談であった。

その時に頂いた短冊の句は

春の草代議士などにふまれるな

で今も大事に保存しているが、以来川維の誌友となり、昭和二十八年春、大阪へ出て来て二年目に、武部香林、清水白柳両氏のご紹介で不朽洞会の末席に加えて頂き、親しくご教示を受けながら十七文字の短詩から深淵な人生を探究し、哲学を学び得て作句は下手クソでも、人間としての巾が少しでも出来たことは、師恩の極みと慶びに耐えない。

今、わが家の茶の間に掛けて日々愛称している

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

の句は逝去三カ月前に書いて頂いた柱掛であるが、私にとってはこれが先生のご遺品であり、私が息絶えるまでの人生指針だとさえ思っている。

前文にもある通り大正十三年に創刊された「川柳雑誌」は先生のご遺志によって逝去と共に一応終刊とされ、同人制による、「川柳塔」がこれを継承、茲に通刊第五三〇号を迎えて、本月はささやかながらも先生の七回忌法要を営み、その記念句会を開催することは、我々の慶びこれに過ぐるものはない次第である。



中島生々庵選

青森市 工藤甲吉

どんぐりはコロコロと俺みたい

十年ぶりすでに炎の人でなし

しあわせな人毒舌でメシを食い

人間回復はらわたに酒がしみ

極楽へさつと行くのもうらやまれ

倉敷市 竹内翁童

マイホーム建ててふるさと遠くなり

義理がたい人で見舞いにもゆけず

七まがり今日一日を終えた路

招かざる客は上座で放つとかれ

すんなりとあやまられた間の悪さ

大阪市 山川阿茶

鯉轍アクロバットもしてみせる

桜散ってもホームコタツをそのまんま

ほどほどの長生きでよし一人ぼち

心ない人から知った二号の子

鍵っ子はおばあちゃん子がうらやまし

島根県 堀江正朗

思慕つるの受話器に妻の声聞けば

妻病みて花も青葉もなく過ぎる

愚痴聞いてもらえはらずの妻は病み

南無大師妻のことのみ祈りたり

死んでたらなどと茶話はずむなり

貝塚市 野坂つき子

ピエロにもなろう貴方が望むなら

汐風を受けて素足の恋駆ける

本当の私を知らぬおばかさん

いつわりの微笑瞳が笑わない
気の強い姉の涙を見てしまい

大阪市 正本水客

南予鹿島付近

盆地かこむ山々 雲のベールを脱いでゆく

石垣に埋もれて家 海に顔を出す

周囲六キロ青ギリと鹿と野猿と波暮れる

鹿鳴いて暮れゆく海に負けじとす

男二人部屋付バスの湯を満たす

倉敷市 本田恵二朗

女上位それもよかと負け惜しみ

威勢よく湯気たて厨生きている

孫のクレオンで自画像を描いてみる

写真整理雨の日曜満ち足りる

シャッターへさて手の置場どこにする

堺市 吉田圭井堂

おんぶしてされて金婚もうそこに

予想だにせぬ脚光の円マルク

腹巻きにどっさり入れてのたれ死

刑務所と変えても同じ人が住み

均衡のとれてるうちは平和なり

藤井寺市

西 いわを

葱坊主なんば伸びてもしれたもの

名目はどうであらうと喰べる会

わが城は一代きりのもので良し

どう間違うたか長押に毛虫這い

シャッターを閉ざし取りつく島もなし

香川県 岡田拳法

共稼ぎ看病もなくただ眠り

上役が君子のようで頼りなし

犠打ばかり打たされ愛社心鈍る

俺にとって可愛い俺よ頑張れよ

速報が伸びず参謀だけ残り（地方選挙）

大阪市 金井文秋

よくもめた過去を忘れた仲のよさ

アルバイトに行くバス代は親が出し

事務員を妻に引き抜き独立す

初月給買いたい物が上まわり

お隣りが家をなおせば気があせり

大阪市 本多柳志

メーデーの中で意見がすれ違い

べんちゃらがまだ利く若さ親しまれ

右顧左べんしてピンポンへ気が疲れ

こっそりと首相も見たい毛語録

和歌浦吟行

観光船マイクで青い岩を見せ

岡山県 浜田久米雄

パチンコのたこを女房に見つけられ
年寄りの匂いが孫を遠のける

よくたべて中肉中背よく眠り

新聞は見出しだけ見る日がつづき

我を通す男に詫びることが出来

高槻市 傍島静馬

丹精の庭に五月の陽が眩し

みじめさは素直に聞く耳持たぬなり

せっかちも寄る年波に追いつけず

ゆっくり養生する気になった翌朝死に

皆去んだあとで名案浮んで来

和歌山市 垂井葵水

山門を出ればカレーの匂いする

恨られるハズの女がひとりいる

稼ぎ手として保育所の門くぐる

土地感があってその穴信じられ

連休で昼のドラマになじみ出来

岡山県 直原七面山

予算不足で橋が半分

つんと澄して美人着席

ビルの谷間で朽ちし青春

拍手する訳にもゆかず名弔辞

遅刻して噂さの女姿見せ

岡山県 大森娛句楽

塩釜の沖から見ても良い木並

釣舟の吹き流された処で釣れ

みちのくの路あちこちに無縁塚

乗り替えて秋田おばこと連れになり

チマキ解き素朴な風味食う端午

宇部市 石川侃流洞

庭いじり駅長さんは暇に見え

意欲もうどこかへ忘れスラム街

舞扇落花を天に舞い戻し

だまされるもんかと聞かぬ四月馬鹿

手まねしてはしやぐ唾の子があわれ

門真市 福島鉄児

叩いたら叩き返すも恋なれや

まかしとき一肌脱いでやるも酒

ここまでは本当これから少し嘘

欠伸して斗志の消えた靴をはく

二日酔何んにも云わぬ妻が居る

兵庫県 遠山可住

出世して同級会をやりたがり

村一番の長老としてひねくれる

赤飯をいただきますながら聞く歴史

父の死に

父を知る父への弔辞読み返し

悲しみを子ら等分に分けられず

豊中市 戸田古方

おむかいの端から端まで顔を見る

青春悔なしそう思いたく

お隣りのお手々キレイキレイ見え

みちにかなえばサボテンも生きられて

連休の混雑隠居はん笑う

大阪市 橘 高 薫 風

戦傷盲人の堀江正朗氏は、かつて路郎忌句会に上阪を
欠かせしことなければ

その人を待つ路郎忌も七回忌

路郎忌に松の洩れ日のなつかしさ

切手にも金魚が泳ぎ風薫る

父の愛娘にあつし 富士桜

日輪へまるとい石なき三原山

大阪市 不二田 一三 夫

手のひらの微妙 裸婦を芸術にする

ほめようがないでニヒルな顔だとさ

ポロポロにしたいと沖縄身請けする

寄席(二句)

先生と呼ばれ芸人 芸が落ち

司会する漫才やっぱり大学出

大阪市 西 出 一 栄

白い月花見に出たか春うらら

草いきれ恋も次第に派手になり

花の色変えて彼女の返り咲き

藤ひらど通院の眼をよろこばせ

出雲市 尼 緑之助

一と仕事タイミングよき茶碗酒

公約数の一つ共斗に逃避する

連休のバスに疲れ切ったシャツ

新しい制服美しきかな学生

大阪市 大坂 形 水

創業三十周年

倒されたのも思い出の三十周年

三十周年不渡り手形の束ができ

形式の謝辞に目頭熱くなる

Mの追善会にて

七回忌三回忌より派手になり

岸和田市 高橋 操 子

還暦(二句)

還暦へ孫が人気の舞扇

湯豆ふのついでに歩く南禅寺

毛せんの赤を選んで京の庭

公害のなき山菜の旅をより

京都府 大鶴 喜 由

叙 勲

勲章を拝ませてくれと飲みにくる

世間の目勲何等のすることか

天皇が今ほめてくれる春秋の間

勲章に妻の内助が見えかくれ

鳥取市 河村 日 満

湯本温泉にて（二句）

温泉の街の旅館もビルになり下り
朝湯朝酒官費旅館に吸い取られ
逆療法でゆけとただ酒すすめられ

妻入院

死ぬほどの病人でなしよく眠り

倉敷市 水粉千翁

嫁ぐ娘（その一）四月四日

角かくし見飽かず父のひとり言
嫁ぐ娘の父へ花かんざしが揺れ
祝福の総攻撃となる拍手
両親もほめてもううて嫁きました

倉敷市 小幡里風

足許の狂い見事に今日を負け

或るショック肩から抜けている動悸

あくびから初まる老夫婦の対話

硝子戸の狂い狂うたまま朽ちる

高槻市 若柳潮花

此処まではダンブも来まい山つつじ

たたかれて叩き返せたのも昔

添うてからあまえさせてはくれぬ膝

舞踊坪山の月より

槍おどりお国へおそい夕桜

奈良県 石倉旅風

度の合わせ眼鏡親切だけ借りる

噴水か小便小僧かの異見

もう来たか咲く花に似て渡り鳥

三月三日

郡山朝から鶯楊雲雀

大阪府 児島与呂志

ふり返るうしろに影だけついて来る

春誘う言葉になって女の目

掘端のタンポポ見つけた大阪城

人生の長さ噂は速く去り

倉敷市 野田素身郎

危篤続く盆栽の土乾ききり

付き添いを労るほかはない危篤

連休へ間に合わないんだ免許証

一人だけ僕一人だけ花の下

今治市 越智一水

腹の立つ電話コードもねじ曲る

旧道がやっぱりいいな野菊晴

ふり向けぬ父がふり向く三回忌

恋人がいない娘がよく笑い

京都市 松川杜的

駅弁の「萩乃家」に再就職

心気一転事務機のはこり拭く

お召列車用駅弁調製(二句)

お召用弁当カラーに収められ

ストの無い会社何だかもの足らず

連休も務めて悔のない生活

岸和田市

福浦勝晴

アカシアの舗道で派手なビラをくれ

押入れに半身入れてゼニを読み

つけまつ毛おもたく人気の下り坂

トンネルですこし途切れる車中談

笠岡市

木山遠二

窮すれば通じ七十年を生き

久しぶりどっちも涙もろくなり

花が散り葉が賞められる番となり

馬鹿笑いて溜息を消してやり

大阪市

西森花村

家賃とる蜂の巢人の言う団地

ナツメロに流す涙は妻の留守

ポイントが切替ったか女去る

時差ばけでねとそろそろ自慢が出

桜井市

岩本雀踊子

裏鬼門母の掃除がゆきとどき

梅雨晴れに腹を立ててる洗濯機

亡き母の年まで生きて墓参り

菩提寺のしじまに鯉のはねた音

大阪市

河井庸佑

どっちでもよいのにめくらたて続け

あやまらず弁解したと叱られる

定退へもう天下る策は出来

後進に譲った椅子がなつかしく

倉敷市

藤井春日

義理人情手の届かないとこへ逃げ

割り切ってしまうば苦境にさす光

目に青葉街はポインで風を切り

愛情を小出しにそそぎ実を結び

笠岡市

松本忠三

呼びつける程でもないに社長室

座布団を裏返しても汚染があり

血が通う訳ではないのが握手する

逆算をして帳尻を合わせるとき

大阪市

福井野迷路

マイペース心のリズムに身をまかせ

恋愛か見合いかと聞く孫娘

笑殺と云う手うまく使いわけ

飄々と又ある時は切々と

倉吉市

奥谷弘朗

遊ぶのが目当で働く世と交り
断わったほうが無難な儲け口

一服の茶にも流儀の裏表

目が合っただけで愉しい友を持ち

定年へもの思わせる小糠雨

白浜にて（二句）

ほろ酔で大人のおもちゃ買いに行く

公害で行こうと選挙事務所きめ

袖カバー残して老兵去って行き

奈良県

そろばんをおいても小銭たかが知れ

向うからにっこり笑う選挙前

通勤に花見の出来るところに住み

浴びるほど薬をのんで瘦せ細り

東京都

急ぐから信号赤になりたがり

勤続十年傷つくことを怖れ出し

口きけばセールスマンの声となり

親友御母堂に捧ぐ

春に近く花のすべてを供として

岡山市

教科書に挟んだ亡母といまの母

仲 どんたく

ピンク散り敷いて落花の舞おさめ
倍にして三倍にして胸算用

両の手で足りぬ拍手が鳴り止まず

下関市

歩かねばおとろえ歩けば痛む足

三次会馬鹿ばかりも馬鹿ばかり

妻の愚痴胸にしむから叱りつけ

どうなるでもないを承知で逢いに行き

東大阪市

山火事の跡真黒な杉並ぶ

車中まで親子喧嘩を持って行く

鯉轎車窓から指し子の騒ぐ

苔寺で苔盗人になっている

大阪市

母の日の母を一人にしてくれる

薔薇見事私の心を独り占め

口紅が褪せて女の業果てる

寂しく育ちお喋りになっていく

松江市

運命の星が狂った妻逝く日

急行で通るに惜しい窓景色

国道に置き忘られて忠霊碑

男の子あり過疎地に泳ぐ鯉のぼり

志 賀 木 石

竹 中 綾 女

小 出 智 子

恒 松 町 紅

川 端 柳 子

愛媛県 渡辺 曉 童

江戸の名残り のれん右書き

きつい自信はミニの脚線

久し振りに上京（一句）

ハトバスの奇縁身共は予州産

くたびれたのから東京駅をはなれ

島根県 小 砂 白 汀

息抜けばバックしそうなとこに佇ち

難ぎたおす構えでダンプ突っ走り

年輪にのりくらりと丸められ

タートルネックで薄き肋をかくさんか

富田林市 岩 田 美 代

花も見て落書も見て古い寺

売言葉買わずに帰る春の風

今日だけはネジ巻かれても踊るまい

限界のない道だから急ぐまい

八尾市 香 川 酔 々

雑魚寝して矢張り個性のあるいびき

生け花もお茶も囁った英会話

この陽気本など読んで居れますか

紳士録ぼくの名前を忘れてる

守口市 羽 原 静 歩

家内の父遠留（一句）

喘息の父おろおろと起きて来る

父の歳越えれば越える風があり

栄転も左遷も見てる鯉のぼり

大器晩成どころか四面楚歌

富田林市 浅 川 八 郎

久し振り父にも母にも逢えて夢

親に孝 子にも孝行初飛行

タラップに伴の腕を頼り切り

ケイブルは新婚ばかり阿蘇の山

尼崎市 高 津 徹 也

入道雲よお前は生き物か

心境を筆のタッチにうったえて

七夕に幸せなりしさの枝

口論も或る交流と信じとく

京都市 都 倉 求 芽

団体の先頭で国訛りはばからず

連休の伝言板も超過密

スモッグを鯉遅しく吞み下し

裸足になっただけでキャッキヤツと都会の子

倉敷市 谷 井 扇 水

現ナマのシコリが留置場で疼き

真心を包めば新聞紙も映える

入社式首にガッチリ輪を嵌める

狂人に似た世話好きが居て続き

青森県

木村 涼人

お宅に限ってと探り入れてみる
嘯み合わぬ齒車に似て倦怠期
式終るまで落着かぬ借衣裳

労務者をあごで使つて労働者
遠縁を何処で嗅ぎつけたか選挙

普通寺市

岩田 ひさお

ミニ・ホットやがて越中はやるかも
皺の無い札も久しい小商い

大阪市

今 西 章 雅

餅は餅屋と云える特技を持つていず
日曜日久々朝刊読みつくす

重くなし軽くもなし膝の骨壺
後妻来たらしゅう物干し日が映えり
涙もろい目に目脂がようたまり
寝返りも夫に触れてゐる寢息

大阪市

河 股 緑 水

鯉のぼり土地で儲けた家に建ち
誰も過去問わぬ気安さ釜ヶ崎

鳥取県

清 水 一 保

鯉のぼり青葉見降し天に跳ね
両肩に期待の重さ知る佳き日

後押しがいるから好きなことも言え
使うだけ使わせ恋は横を向き
美しい思い出だけに眼をつむり
妻逝きて五年

名古屋市

吉 田 水 車

万雷の拍手が票につながらず
金使う暇のない程良くかせぎ

小松市

馬 場 魚 山

八重つつじ枝の細さを考えず
春日和食べすぎて居る池の鯉

どれをどう着こなしたとて年は年
ゴールデンウィーク疲れを買いに出かけたり
向い風今ライターは意地となり

鳥根県

藤 井 明 朗

下馬評がよかった筈にダルマの目
黒ずんだバナナひと盛りにある人気

流行を着るふる里の親しめず
緑一色一坪の庭築しませ

大阪市

西 田 柳 宏 子

買って出た恋のかけ橋ピエロめき

大田市

藤 田 軒 太 楼

惚れていたなアと別れてから判り

焦点の呆けた所に女佇つ

出直す氣やる氣に満ちた菜ッ葉服

竹原市

山内静水

狸寝がむくつと座ったひとり言

ご苦労をかけます貴男のあばら骨

頭べこんと下げて心の通う方

松江市

中川晃男

ひょんなところで左手使われる

言いたいこと言つて女史はまだ独身

悲喜すでに思い出となる落日譜

米子市

林瑞枝

口先の世辞にも老母のま正直

大学の子の蔭膳もある祭り

日記風の便りにナンバーつけて貯め

高槻市

福田丁路

稼ぎ捲つて花も緑も無い暮し

死ぬ事の容易さ思ううつろな目

不作法なカメラに巫女の目が光り

大阪市

木村水洞

おとりとは知らずチンピラ啖阿切り

貶してはいても夫の咳案じ

春眠へ夜明けを告げにくる雀

大阪市 有信新之助

一膳を出すには不便な夫婦箸

坊さんにいい風燈明消えかかり

ひらがなのように曲つてゐるいは坂

大阪市 天正千梢

ツケマツ毛ペロンと落し笑いこけ

重たいとも言わずビルの下敷

伏見山大雨

朱の鳥居たよりに視界ゼロの山

米子市 八木千代

口笛を子が吹いている久し振り

手鏡のなかにふしぎと明日の顔

手にあまるさわらびこは故郷です

姫路市 隠岐不醉

当選で大勢の人に借が出来

冗談じゃ許せ許せに骨があり

大声に泣かれて孫の勝となり

岡山県 池田古心

家事万端妻にまかして今日も釣り

針御免餌だけ馳走と取つて逃げ

お手頃と云う五桁に手も出せず

松江市 小林孤呂二

浪費のできる男と羨まれ

精一杯へとどかなかった日の余白
落選のポスター晒ものにして哀れ

神戸市

小浜牧人

一と言の感謝へ妻は涙ぐみ

そよ風に押すな押すなの葱坊主
軒の巢に親子の情は哀われなり

高槻市

山田季賛

夕陽沈む橋脚元氣よく浮び

鼻息の荒い男で見込まれる

無理をした過去あり今日を病むベッド

鳥取県

森田布堂

ワラ家から今朝も光った新車出る

觀光の島玉碎は忘れられ

建て換えた店に客足遠ざかり

愛媛県

村上旭童

耳がちと遠うなりかけたのにあわて

割り込みへもう逆らわぬ氣の弱り

これだけは死ぬまで作る氣の田ん圃

鹿児島市

土岐トク子

手折り来て見る木の青さ染井墓地

アヤメ咲く里訪い茶人のむれの中

石州の庵主もかくぞと僧語り

堺市

藤井一二三

旅の駅まず青空を褒めて降り

園児今日ストのパパに迎えられ

室生寺参詣

女人高野慈悲石段にあるまるみ

東大阪市

宮西弥生

ふんぎりがつかない別れの交差点

ふるさとの山河に詫びている失意

原色に着替えて女の憂さ晴らし

大阪市

川口弘生

テレビにて我が胃のニッシェと対面し

典型的潰瘍ですねに或る安堵

思たより痩せていないと見舞客

堺市

伏見茂美

めぐりあい今は笑うて話す人

汐の香がやんわりほほへ浜の宿

雨上り淡くかかった春の虹

大阪市

宮尾あいき

長男結婚式

人並に姑となる祝膳

息子でかした賞めてやりたい程の嫁

初節句隣の鯉でまにあわせ

奈良市

宮口笛生

鯉のぼり奈良の空氣もきたないね

母斗病一年

寝返えりに布団が重い母となり
慰さめるだけの孝行しかできず

姫路市 村上春巳

那智石を拾いそこねたスケジュール

和歌山市 野村太茂津

二日酔い観光バスに引きずられ
旅疲れ丁度お風呂が沸いてます

大阪市 吉岡美房

七人の敵へネクタイ締めて出る

広島県 高橋鬼焼

貧しさをさとの自慢でおきなえり
ハンサムが一人まじって姦ましい

兵庫県 大江秋月

退職金やと土地だけ買える額

守口市 村田瓢太

応接セット新築までに月賦来る
十年後役立つ垣のまさ木植え

大阪市 宮地双楽

欲求の不満か社長の顔けわし

倉敷市 小野克枝

自己過信相手の肚を読みちがえ
世間虚仮叡智の太子のたまえり

東大阪市 竹中肖二

苔寺の苔へ新緑影落とす

大阪市 西川誓二

広漠として妙心寺の庭は暮れ
春の陽に蜥蜴が背中干している

竹原市 森井菁居
感傷が俄か詩人にしてしまい
今肩をはなせば愛がこわれそう

サボテンの子でさえ枯れるのも混じり

スピーチは支離滅裂のよろこびよう

ちよっとしたしぐさに愛の胸の裡

公害を春がすみかと洒落てみる

どの薬飲もうか咳がまだつづき

石段をかぞえていどむ松葉杖

母さんに意見がしたい反抗期

割勘でないと決ればついて行き

嘘すでにばれているのになおとぼけ

魚心・水心あり事がなり

白い杖じつと赤信号を待ち

人生を彩る赤も白も欲し

遺言を書きなのおす程長生きし

いと軽く我が児へ乳房の母性愛

限界へ来てからストは手を握る

気前よく社用の宴にあぐらかく

堺市 高橋 千万子

忍耐へ風船玉は割れて見せ

ナツメロに昔の疵をゆすぶられ
クラクション鳴ってマンション灯がとまり
点字読む指が器用に夜が更ける

聞いて来たよい事だけを口にす

岡山県 出 原 敬 一

ごちそうのこれが主役か皿の鮎

笠岡市 木 山 要 次

香奠に一枚足した貨幣価値

坂のぼる思いで二人の子を育て
十七字どころが高利返済中
学のない親 親なりに子を案じ

ジャンケンで決めて母への贈り物

伊丹市 小 川 静 観 堂

コマーシャルソングも軽い厨妻

大阪市 水 谷 竹 荘

女心続き見るまで気にかかり

草枕旅にあればライス・飯
腹割いて首落させて幕引かず
どれが初恋だったか今にわからず

中年の恋生活力も考える

和泉市 西 岡 洛 醉

無理をしてまでも浮気はしたくなし

大阪市 江 城 修 史

五月一日義兄逝く(一句)

三歳の抵抗はかなく泣寝入り
露地の奥同期の桜千鳥足
世話女房です庶民です僕の妻

俺の分までも生きよと言ひ遣し

大阪市 室 谷 徹 舟

去りがたき舗道に未練な小糠雨

世話やいて心許せぬ友と知り

コンペヤに乗ったみたいに通り返け
合物に替えた日から寒くなり
主権者はあなたと憲法おだて上げ

平田市 久 家 代 仕 男

生きている仕合わせ孫と車椅子

八尾市 飯 田 一 治

山ひとつ越して絵になる旅の雲

左遷地でゆっくりと吸う青葉風

驚いた格好りハーサルして見せる
カーテンを吊り替え春を引き寄せる

呉市 林 野 甦 光

両親の石碑建つ

せまかった七年目に墓笑う

宇部市 平田実男

友市議当選（二句）

当選へ見知らぬ顔が先に酔い

奥さんに皺を増やして選挙すみ

晩婚の友に贈る

両親に同僚近所をほっとさせ

出雲市 原 独仙

さわやかな五月モヤモヤ悩みごと

そうか知らないと凶星が嬉しそう

朝顔に水やる日課という余生

八尾市 高杉鬼遊

皿うどん皿に盛られて落ちつけず

ラブソング回らぬ舌へ手を叩き

お手洗い男が赤いバッグ持ち

笠岡市 出原真奇

挨拶に泣くかも知れぬと一寸と飲み

骨にすぐ着物きたよな父達者

起されるのが起きて起すのが寝てしまい

鳥取市 川崎秋女

連休の予報も添えて誘われる

コツコツコツコツお父ちゃんが戻って来た

恋知ってライバル持ったお人好し

諫早市 原田明春

お別れへ無言同士の手の温み

組合旗の犠牲になって左遷され

ママごとに夫婦けんかもいれてあり

新宮市 大矢十郎

昼の湯を出れば現実待ち伏せる

火葬にも似て落選のビラが燃え

覚えたは勅諭覚えられぬ法規

松江市 岡崎祥月

おい雲よ太陽が遊びに来たよ

子を叱ると一言愛のこもる口

大阪市 中川滋雀

瀬戸の旅（二句）

鼻先きへレモンが誘う島の顔

これからが坂と判った廻り道

松江市 柳楽鶴丸

ヤングパワー東京サバクに夢求め

メーデーの歴史を知らぬまま参加

兵庫県 河原みのる

老いのクラス会一期一会の型で寄る

わたしより先きに死にやと老妻が急き

芦屋市 丸川初甫

カレンダーを見い決める電話口

簪どこにある日曜の亭主

西宮市 島居百酒

悪名を売って小善疑われ
禿げるより白髪がましと抜くをやめ

奈良県 西辻竹青

三千年の歴史がこうと居直られ

満五十年めに断髪

丸坊頭デッチ帽子がよく似合い

東大阪市 齋藤三十四

奈良生駒墓地の売物見に歩く
アルバイトに主任という席をくれ

和歌山市 土谷城石

空港に今日も私服の眼が光る
消灯の街をコツコツパトロール

★ 西尾 榮

香港、マカオ行

団体のわが年頃に似た夫婦

機内食ままごとめいたものも出る

足腰のたつ間という旅だより

ギャンブルにうつつぬかすも旅のこと

菊沢小松園

人間が拝む阿弥陀で金に塗り
道ならぬ恋も仏へ掌を合わせ

その俣の姿画になる懐ろ手

雑草の意地倒されたまま花をつけ

帯きつく結び直したを悟らせず

川村好郎

逆立ちでもします銀行のドア押す

一瞬の打算善意ひっこめる

仲人の不首尾云わさぬ早合点

神近き心はあれど淡い霧

新社長就任を祝う

喝采を浴びて口上の幕が開き

若本多久志

エンジンもかけっぱなしの七十年

人れ歯ではRとLがもつれてる

造反が茲にもあった口答え

底流に老いへ蔑視見て寂し

晴耕雨読そんな暮しも言葉だけ

北川春巢

真冬より見た目に寒いつゆのミニ

珍客にされて無理やり酌をされ

はめるコツ習ってお庭見に出かけ

階段が健康によいという若さ

亡父五十年忌

五十年忌都合よい時せよと寺



お待せしました！

清水白柳遺句集

— 七月十一日路郎忌に発売予定 —

序文・中島生々庵主幹 (定価六百元・送料百円)

★白柳さん、正に全国川柳界にとっても大先輩として、貴重な存在であった。

(中島生々庵)

★私が出版した句集(老いの坂と親ごころ・子心)は二回とも、白柳さんの温い指導と援助を仰いだ。(若本多久志)

★柳社を超えて、東奔西走川柳の社会化、新人の開発育成に尽され、それを生き甲斐にされた。(川村好郎)

★川柳に対する情熱と執念は、自ら川柳狂を名乗るにふさわしいものがあつた。

(西尾 葉)

★川柳生活四十数年の想い出の中に白柳とはただの一度も口争いや口論をした記憶がない。(菊沢小松園)

急逝の直前まで、句を集め、B6版のスタイルまで考え、いつでも出版できるように準備しながら、ついに「清水白柳遺句集」というタイトルに変わってしまった。白柳さんの声は聞えなくなったが、その柳魂はこのように生きている。(八月の本社句会を「清水白柳遺句集」刊行記念句会とします)

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇 川柳塔社

川柳塔社常任理事会

路郎忌川柳大会を成功させようと、六月四日六時から常任理事会が開かれた。

およそうちほどの種の大会のヘタな柳社はすくないであろう。これを切り替えようとするのが多久志大会委員長である。

余談ではあるが、新鋭幹事多数氏が自発的に会合をもち、逆に大会委員にうれしいハッパをかけるなど(不二田宅へ電話)こういうことは過去にもなかったように思う。

句会幹事のチーフ西田柳宏子氏はか、大会より早くこいとエネルギーが燃えている。

「清水白柳遺句集」は、葉刊行委員長の手で着々進行中である。小松園、摩太郎氏らの協力もめざましく、このほうも成功まちがいなしとは心強い。

出席・多久志・古方・生々庵・静馬・古方・万的・柳志・文秋・好郎・薫風・葉・小松園・一三夫諸氏。

川傍柳 初篇研究

(九十六)

前田喜代人 川端柳風

故 岡崎重義 高須唾三味

清 博美丸 十府

藤井和雄 岡田 甫

586 御屋舗へ大ぶきげんで御帰り

井 司

藤井〓大不機嫌と解して誰のことやら具體性が無いが、高尾に振られた仙台候あたりではなからうか。こういう句は不明瞭な句で苦手だ。

川端〓賛。高尾に振られたよりは、暴漢におそれ例の豆腐屋に伽羅の下駄をやった帰りではないか。

高須〓礎解よりなし。振られて帰った伊達候の心境。不キゲンは当然というところ。清〓同。出典未詳だが左記の類句もある。

また今朝も不興で芝へおん帰り
丸〓高尾にふられた仙台候。

岡田〓同。

587 暮切ってから二三寸嫁はしより

秋 紅

藤井〓余程の急用か、雨模様となったのか暗くなるのを待ちかねて、はしよってかけだした。「暮切って」「二三寸」が嫁さんの初々しさを強調している。嫁でなければ暮れきらぬうちに尻をまくってかけ出したことだろう。

高須〓知り合の家で雨のやむのを待っていた嫁さん、もうこれまでと暮れ切ってから裾をはしよって家へ帰ったのである。

前田〓ここでの場所は自宅でも他家でもよいが、「暮れ切ってから」「二三寸」「はしより」とそれぞれ含みをもった言葉により複雑なものを感じさせる。「はしより」は尻をまくりとか裾をまくるとかではなくて、飾りがなくなりとか取り乱した状態になる意にとりたい。「二三寸」はほんのすこしの意にとり、昼の間は家事その他でと

藤井〓

588 おしいことした跡へ嫁藍をぬり

…である。

岡田〓小生も野がけ説。歩きいように…

丸〓野がけなどの場合と解す。

やはり雨の句だろう。

岡崎〓傘を借りることもできず雨宿りしていた嫁が、雨のやむのを待ちきれず、幸い暮切って人目にたたぬようになったので、駆け出したのである。それでも着物のスソをまくることはできず二三寸はしよって。

顔にあざ二つ出来ておしい事
三日月を二つこそげるおしい事

傍一 22
傍一 5

一 甫

と前述の句と同様の句。惜しくもそり落した眉のあとに藍を一さしさしたから一層清々しい目もと。「おいしいこと」ではなく、惜しいこととした跡へと読むべきだろう。

高須 嫁の眉おとし。礎解通り惜しいこととした跡へ間違ひなし。但し藍をぬるまでもなく、くっきり二つ濃い藍色が残ったであらう。

清 おしいことをしたのはお齒黒をしたことではないのか。お齒黒をした跡へ重ねて眉をそり元服をしたということではないのか。但し、お齒黒については惜しいことを詠んだ句を見かけないが——。惜しいことの類句によれば、やはり眉をそるだけの意か。

丸・岡田 高須説贊。

589 義理はりもしらず土蔵を又立る

榎水

藤井 爪に火をともしてかせいだあぐく、一人前の店を持つても、まだつきあいもないで義理を欠き、また蔵を建てやがったとの江戸っ子らしいやっかみ。義理はりとは世間への「つきあい」と「みえ」。

川端 前身は必要ないと思う。現在大金を

もちながら義理を欠き、儲けることにあくせくしている様をけなしたものだらう。

高須 義理張りも知らず「やはり爪に火をとますようにして、せつせと金をためた男の感じがでている。「土蔵を立てる」

が「あいづまたくらを建てやがった」に通じるので「世間に関係なく」ととれる。

清 江戸っ子から見れば、生まれそこない金をためであらう。

丸 世間づきあひも知らず、またまた土蔵を建てやがった——と宵越しの金を持たない江戸っ子の非難とやっかみ。

岡田 贊。

590 奉公に四五日上力る不届さ

長笑

川端 行儀見習などで名目だけの四五日がすぎるとヒマをとる。それも「不届」とあるから小便組の妾である。小便組とは、仕度金をもらって妾に上がるが、寝小便をして下げられる者をいう。句意は妾奉公に上がつて毎晩寝小便をするので、四五日すると下げられてしまったが、その実仕度金かせぎをしている不届者だ。妾の中にはわざと寝小便をする者があつたらしい。

高須 「寝小便組」とは俗にいう「小便組」のことで、悪ラツなお妾商売の別称。

「明和・安永の頃江都に小便組といえる悪俗あり、少数の容貌絶美なる婦女を売って大家の妾とし、主人と同衾して小便をもらさした。かくの如く数所に拡売す」(楓軒偶記)で、これを不届きといったのである。

お妾の乙な病氣は寝小便

末14

前田 両説贊。「小便組」はまた「手水組」ともいった。

手水組ではないかなと局いひ

一一・4

清 贊。しかもその被害者は、ほとんどが高録の武家。

藤井 高須説に贊。川端説の「なかにはわざと云々」とあるが、そうでなくここでは故意の寝小便であるからこそ不届なのである。

くれぬならかのをしやれと妾の母

小便で飯を食つてゐる太え母

となるとひもつきの母が不届きなのだが、いづれ同じ穴のむじなだ。

丸・岡田 諸説贊。

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 10 —

洋画入選そんな才女であつたのか

三十三年十一月号

本社十月句会「家風」

低姿勢を祖父の代からうけついで

三十三年十二月号

南海電鉄川柳会「十戒」

十戒はおろか一つにつままずきぬ

大阪通信病院川柳会「裸」

告別式へは失敬したと裸で居

三十四年一月号

不朽洞句帖

三十三年十月号
不朽洞句帖

そこえ行くようにモスクワへ行く若さ

三等で行くと学者はわるびれず

としよりの会はよぼよぼと寄り

死にそうになし会長におされてる

舞姿師匠太れるだけ太り

秋の庭キャツチボールの音のみす

台風もカンナたおれただけですみ

本社九月句会「世間」

世間態かアハハと父は笑つとき

杏林川柳会「間抜け」

間抜けめと一喝されることに馴れ

南海電鉄川柳会「才女」

時の流れをハツキリ知つた皇太子

清潔な方よと そつとのろけられ

皇太子さまの選外佳作だつたのよ

三笠宮をおこらせたのも歴史なり

新聞に出たことだけで批評され

初日の出 自由はここにあるものを

音痴でも君ケ代だけはうたつたが

凡人にとつては松竹梅もよし

生きのびた印しに出した年賀状

名刺一枚で風の如く去る

杏林川柳会「氣短か」

氣短かの夫のあとの忘れもの

大阪通信病院川柳会「臨月」

臨月へここで飲んでる電話なり

三十四年二月号

不朽洞句帖

味気なし窓ばかりのビルが建ち

M過剰でしてと後家のためらわず

学歴は尋卒市議の才をもち

まだ欲を残し交通事故で死に

停年で二号の方に居るそうなり

生々庵医博の令孫滋郎君の誕生を祝して

海に臨み陽の出ずるごとと生れたり

形水氏邸の新築を祝して

新築をのぞけば春の陽射しにて

栗氏令嬢杏子さんの結婚を祝し

洗濯機うれしくあなたのシャツパンツ

高安六郎医博を悼む

謡本 ひらいたままの寒いこと

三十四年三月号

宝塚映画製作所訪問 (三句)

法善寺ボクを明治へ連れ戻し

セツト街中からバアと云われそう

うちよりはましなセツトの家が建ち

杏林川柳会「実力」

実力はこれ以上だと言いたそう

大阪通信病院川柳会「猪」

村長のしし射とめたを三度聞き

南海電鉄川柳会「乗越し」

乗越してここの名所を見て帰り

三十四年四月号

皇太子さまの御結婚を祝して

前略—私は社会的にも、経済的にも全く別の世界に住んで

来た一野人に過ぎないが、国民の一員として衷心からお慶び

申上ると共に幾久しく皇室の御繁栄を祈念してやまない。

麻生路郎謹記

本社三月句会「商才」

おつさんと言われ商才ありあまり

下足でもやりかねまじき商才よ

南海電鉄川柳会「国旗」

うちだけが国旗をしまい忘れて居

(傍島静馬)

「句の生命」について (中)

北 川 春 巢

(二) 時代の変化と句の生命

時代が変り、物の考えかたが変つたために分らなくなった句が多数にある。「柳樽」の句で分らない句が多いのは、主としてこの理由によるものである。江戸時代の社会の状況を、その頃の封建的武士、町人の物の考え方を知らなければ、句の真意は分らない。

現在、「川柳塔」誌上には「川柳研究グループ」の八学者による「川柳初篇」の研究が発表されつつあるが、あれほど懇切丁寧に説明してもらつても、なおかつ得心のいき兼ねる句もある。またグループの中にも意見の相違もあるようである。「初篇」の句は、選者川柳翁の目を通り、当時は誰にも分り、誰からも称讃されたに違いない句ばかりだと

思うのであるが、これらの句に生命があるといえるだろうか。「川柳初篇」は安永九年(一七八〇年)の発刊だから、今から僅か一九〇年ほど前の句である。その間に世の中の移り変りは激しい。そのために、ほとんどの句は死んでいるといってよい、と私は思うのである。

徳川封建時代の昔はいわず、私が川柳をはじめた頃、昭和初年の句でも同じことがいえるのではないかと私は思われる。

路郎先生の句を例にとり、また私自身のことをいって誠に恐縮だが、一、二の例を挙げさせて頂きたい。

俺に似よ俺に似るなと子を思い 路郎

この句は、「生命ある句」だと思つていた。いや今でもそう思つてゐることに変りはない。しかし、自分でよく考えてみると、はじめて

この句を見た時、私には妻も子もいなかった。その時の印象と、結婚して子供が生まれて、その子供がまだ幼なかつた頃、この句を読んだ時の印象、そしてまた今や子供が成人になつてしまつた時のこの句に対する印象、それだけがみな違つてゐるのに気付くのである。「生命」とは成長もするものだから、それが当然だとも思えるし、またその時その時で印象が違ふような句が「生命」があるといえるか、との疑問もいだらうのである。

もうひとつ例を挙げよう。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ 路郎

この句も私の好きな句で、「生命ある句」に数えていた、物欲を捨てよ、というような処生訓のようなものも感じられる。しかし最近日本人の体格も大きくなり、また畳が団地サイズで小さくなつた。「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」でなくなつた。寝転べば、畳をはみ出す人が多くなつた。近頃の若い人がこの句を読んで、果してわれわれがこの句から感じた、あるいは今でも感じてゐるような気持を持つかどうか、疑わしいと思うのである。

世の移り変りは激しい。読者の精神の成長変化とともに、句の印象は変ると思うのであるが、これは句の「生命」とどんな関係にあるのだろうか。

蔑乃先生の句を一句例に挙げよう。

葉の花はあの屋根のはて屋根のはて 霞乃
この句も私の好きな句である。恐らく先生のお宅の二階からでも見た景色を詠まれたものであろう。しかし現在、都市化の進んだ大阪あるいはその近郊において、このような景色が見られるであらうか。葉の花を見たこともない人も育ちつつあるだろう。とすればこの句の「生命」はどうであらうか。

世の移り変わりどころか、同じ時代においてすら、句の意味の取り方が、読者にとって違うということがままあるのである。これは意味論の問題でもあらうが、「時の川柳」誌には、「句の他解と自解」という欄があって、ひとつの句を読者数人が鑑賞し、最後に作者が句の意味を解説している。もちろん作者の意図と同じ意味にとって鑑賞している場合もあるが、また全然違った意味にとっている鑑賞者もなくはない。また全然意味が分らぬ、とお手上げの鑑賞者もたまにはあるのであ

る。人それぞれ自己流に解釈して句の鑑賞をすることは悪くはないが「句の生命」という意味では果してそれでよいのか、とも思うのである。日本語の意味で二様に解釈される場合だってもちろん多いし、作者と違う意味にとったてかまわれない。選者がどの意味で入選させたか、も知りたい所であるが、そんなことは不可能なことで、発表された句を、自己流に解釈して鑑賞すべきである。しかし「句の生命」という点から考えると、ちょっと頭がおかしくなる。

所詮、川柳は社会批判というところで満足せねばなるまい。そうとすれば、社会状況が変れば、意味が通じなくなる、という運命を荷っているといわねばなるまい。

現在やかましくいわれている「公害」の問題だって、何年かさきには鳴りを静めるに違いない。公害に対する批判は多いが、人間の知恵によって、公害のない社会が生れるに違

いないからである。そうでなければ、人間は滅亡さえてしまうと説く学者もあるくらいである。したがって

公害の届かぬ所へ社長住み

草 春

というような句、現在、名句だとしてもはやされているのは当然であるが、公害のなくなった将来は、何のことか分らぬ句になってしまう恐れは多分にある。

結局、路郎先生の「生命ある句」の教えは、句の寿命がいつまでもつづくということだけではなさそうだと、思えてきた。ただ、自分のいわんとすることが読者に伝わらぬようでは困るのであって、その句に対する共感が現在多ければ多いほど名句であり、やはり「生命」のある句である、といえると思う。「生命」ということばの解釈を変えねばならない。句の「生命」と大阪城の「生命」とは、同じ「生命」でも同日には談じられぬと気付いたのである。

キリストの

高 鷲 亜 鈍

キリストの化身とみたり大鴉
カアッノ鶏鳴にあらず明日を告げる大鴉

明日に股かけて飛んでる大鴉
大鴉首をのばしてくわつと鳴く

ボロボロの翅とは知らぬ大鴉
戦争の空掩いたい大鴉

大鴉冠葬の日に影落す
大鴉悪夢のように翹ひろげ

大鴉にわが肉体を再生す

人肉を啜えて征くや大鴉

大鴉月を掩えば蟹肉太る

白鳥の死よりもばくのロマンは大鴉

大鴉ロマンの風を巻き勃す

海へ来て戦争やめろやめろやめろ

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

何よりも阿呆になれという見舞い

傍島静馬

病は氣から来ると云う。氣から来た病の上に更に氣を使つていてはよくはならないわけだ。なにも考えず医者云うとおりにしておればよくなるに相違ない。この慰めの言葉が「阿呆になれ」と急所、極点をついている。ありがたい言葉でありうれしい句である。

宇宙開発よりも身近かな事があり

木村水洞

世界の先進国は宇宙開発に莫大な費用を投じている。これもよいが国内にはそれぞれ多くの問題が山積している。これらを解決せずして雲をつかむような宇宙開発は実にどうかと思われるのである。修身齊家治國平天下と云う言葉があったようだ。

人間のおしまい箸で拾われる

工藤甲吉

五十ただ一抹の煙上げただけ——某人の句を思い出した。切実な句である。誰しもいつかはこんな状態になるのはわかり切っているのだが、そんなことを考えていては仕事に手につかぬから明日を目指して働いているだけのもの。

湯の宿でかえりたくない湯につきり

水谷竹莊

同僚はもう帰り仕度をしているのに最後のひと浴びをしている人がよくある。そんな人に限って旅館へ来てひと風呂、寝る前にひと浴び、明けきらぬうちに一度、そして朝めしあとの最後の湯。これほど入れれば湯疲れも出る筈だ。温泉はよいところお湯好きの人の気持や環境が惨み出ているはほえましい。

通夜へ急ぐ白きを桜と見て通り

遠山可住

さくらが咲いたところのお通夜である。歩く春の夜の道にはさくらが咲いて満開である。けれども悲しみの家へ急ぐ人の目にはさくらはただ白いものとしか見られない。夜桜を賞でる心の余裕がない心境は白きを桜と思うだけだ。その人を詠んで実に深刻である。

聞き合せひとつ言えないことがある

小野克枝

聞き合せは人生の最も重大な場であるが故に聞く人は真剣であり、こちらにも応えて知っていることはみな話して上げたいものだ。が申し分のない家にひとつ困ったことがある。そのひとつを話せば縁談はおじやんになることがはつきりしておれば、これだけは話してはならない話せないのだ。このひとつがこの句の生命で笑顔の中の鋭さがうかがわれる。

停年の会釈さびしい肩であり

林野麴光

淋しい肩はよく見て来た。私も停年のころは淋しい肩で会釈を返していたに違いない。長い間の勤めが解放される気持は気持としてそこに言い表せぬ淋しさが漂うからである。淋しい肩と見た作者の感は当っている。

お勝手は何でもいいに困り果て

吉田水車

何でもよいから早くしろと言われると台所はさて何にしたものかと首をかしげる。欲しいもの食べたいものの名を挙げてくれれば目標ができてすぐ動けるのだが。あやふやな注文にどきまぎしている台所のユーモアだ。

▼福島鉄児氏(高槻同人)は一応全快というところで四月ぶりに解放された感じとのこと。

近作柳樽

秀句鑑賞

—前月号から—

若本多久志

酸素吸うベッド見つめる子に詫びて

堀江芳子

主婦の任務は重い。その句主が病を得ての病院生活、脳裏に去来するさまざまのあせりとその責任感、特にご不自由なご主人をもつ貴女には一入のこと。下五が寂しくも又強くこの句を生かしています。

朝夢の余韻残つて嬉しい日

竹内一世

暁方にうとうととみた嬉しい夢。それをひねもす抱き続けて、ひとときの倅せに生きておられる女心が羨しくさえ思われる。

出戻りの女の謎は解けぬまま

木村弥栄子

主観の句として頂きました……古来離婚を詠んだ句は多いが、この句のように真髓をえ

ぐった手法には敬服します。

末つ子巣立ち家飄々と風ぬけて

錦織文子

幾とせかの苦しみに耐えて、育てあげた四、五人の子供達、その最後の子まで家を巣立って行った時、家の中はおろか、親の胸中までもうすら寒い風が吹き抜けてゆくようである。

石橋をたたいただけの北枕

関美子

無言のまま北枕に寝かされた人は、親か夫？然し人生には金でもない、栄誉でもないもう一つの尊いものがあることを知れば、涅槃の喜びではないだろうか。

足のケガ診せるに化粧念を入れ

林露枝

幾千年の昔から、女は常に美しくありたいという強い欲望に生きるのが、自然の姿である。然し、その中にいて自己の反省を忘れないことが大切でしょう。

出産の妻へ遅々としてカレンダー

古川良光

「光陰矢の如し」という詠嘆は、自己の無力を感じる場合などによく出る言葉であるが、これは反対に、生れ出る分身を待望する親心が、光陰遑々として進まないはがゆさへ

の詠嘆詩である。表現の妙。

愛しかと胸に刻んで受話器切る

小山悠泉

下五の終りを、敢えて「切る」と結んだ処にこの句が強く生きて、愛のたしかさを髣髴とさせる。

筍を喰べただけ盲の春は済み

本間満津子

中年から失明された句主だと拝察。宿命の生活からも、四季感を舌で味わうという執念のようなものに強く打たれ、只々精進を祈念するばかり。

大阪井同士で同情板につき

森本黒天子

いい着想だと思う。心からの、しみじみとした同情の言葉は、決して歯切れのよい江戸っ子弁では表現出来ない。

(誌面の都合で鑑賞を割愛した秀句を左記します)

おトイレの鏡に素顔のぞかれる
亡き母と寂しく八十路生きる父
会社ではベテラン家では世話がやけ

福子
鹿の子

遠方の桜が好きな自家用車

比呂路
秋星

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四六年二月号
至 四六年五月号

路郎賞候補作品

北川 春 巢

サーピスに白紙で渡す領収書
箒の目生かす銀杏の二三枚
毛皮着て女にめぐる獣の血
お守が守ってくれる空財布
拍手する片手は義理の音がする
ママの愚痴聞く勘定はこつち持ち
無事な旅備品と書どふとんに寝
満ち足りて後毛なおす姫鏡
長持ちをつふし一回風呂が沸き
父の忌や父に習うた普門品

有信新之助
小砂白汀
橘高薫風
高杉鬼遊
内藤きさ子
垂井葵水
渡辺曉童
村田瓢太
遠山可住
志賀木石

若 本 多久志

借りて来て貸して長屋の十二月
つけまつげ涙を何と受けとめる
木村水洞
高橋千万子

川 村 好 郎

妬く事を忘れた顔の渴き見る
夢は見るもの欄めば消えるも
アンテナの違い噂に疎く居る
娘を離すひとのころを忘れぬ
拍手する片手は義理の音がする

岩田美代
不二田一三夫
林 瑞枝
八木千代
内藤きさ子

西 尾 菜

かたつむり今更家をすてられず
手をつなごなんて結局みな孤独
想い出が呼ぶから振りむかぬ私
鍵束で看守女囚の児をあやし
能面の下に炎えるもの見せず
義理欠いてから敬語を使う仲
倅せは鬼才と言われる子を持つ

高杉鬼遊
中川兎男
野坂つき子
島居百酒
八木千代
垂井葵水
林 瑞枝

紫蘇めしの味を求めて古寺ひま
戦傷へ日の丸立てぬ意地をもち
出る杭のたとえに耐える日もあり
ただれた心観音様が抱いてくれ
要領ようやれよと左遷肩叩く
新調をうつとり締める帯が鳴り
下積へハイと答える妻のいて
男手で嫁かせる朝を小雨降る
振り向けどふりむけど母立ちし
美しく死にたい欲も持ちはめじ

正本水客
越智一水
小林孤呂二
天正千梢
遠山可住
岩田美代
山内静水
恒松町紅
大鶴喜由
本多柳志

新猶山節

告別式物心ともにけりがつき
つくなつた方の噂は拡がらず
人妻という距離にして歩を揃え
女上位も結局夫の印が要り
しがらみの中にいるから美しい
捨てに行く手間を省いて置く出る
曲線も大事に引いて明日がある
河原みのる
小野克枝

本多柳志
垂井葵水
小幡里風
本山要次
有信新之助

大坂形水

絶対安静そんな余裕がありません
スモッグではいゝ霞うたがわれ
カタンカタン水を聞いて僧孤独
最新の設備へ入院する不幸
救いようない沈黙に雨の音
家に店て半端扱いされる人
ゆつくりと寝て敗北の朝でなし
長男の下宿へ長男とゴロ寝する

菊沢 小松園

汚れても海しか貝に家がなし
意地持たぬ落葉が風のまま転げ
あるときはつらら曲って見
救いようない沈黙に雨の音
古傷にふれて女房喰い下り
これ以上は家を出されるミニ
鳥籠のせめて青空見える窓
米余る国で雀はまだ追われ
この水に馴染めと小鮎放たれる
抱擁をすり抜けてゆく台所

正本 水客

指切りをしたい小指の弥朝仏
汚れても海しか貝に家が無し
カーテンのない窓があり冬の月
長男の頭へ手を載せやすき背丈

福島鉄児 志賀木石 松川杜的 出原敬一 岩田美代 西 いわを 水粉千翁 弘津柳慶 森井菁居 垂井葵水 小砂白江 岩田美代 福島鉄児 仲ごんたく 小出智子 工藤甲吉 吉田圭井堂 高杉鬼遊 香川酔々 森井菁居 村上旭童 橘高薫風

川柳塔賞候補作品

戸田 古方

することはしとこ神さま見ても
養殖のいかだ動かず初春の海
金儲け下手とは妻ももう云わず
手袋に切符の薄さにぎりしめ
口笛が吹けて少年らしくなる
すし屋のふきんあれも拭きこれも拭き
有信新之助 岩田美代
妬く事を忘れた顔の渴き見る
女ごころへ土足で上がって来た男
不二田一三夫

束になって銅貨のごとく立ち向う

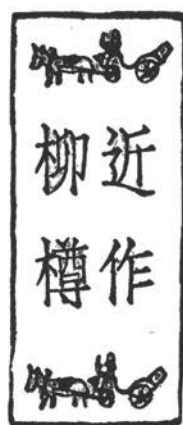
けつきよくは一人となぐ廻り道
春風がトイレの窓からこんにち
むき出しの手摺りが寒い通用路
おでん鍋汚れておでんらしい味
晩酌の量間違えた黒田節
悪党の霊前に花美しい
野仏の顔にも昨日と今日があり
過疎の波ひたひたという音でなし
老妻への小言は小黒板へ書き
関 美子 今井松花

橘高 薫風

雑布がかわいて愛の破局くる
ことさらに鯉けむらせ不和の夜
年一つ取って明るい色を着る
脊かれた日も何気なく化粧する
春風の誘惑鍵までかけ忘れ
青春を描くパレットに色がない
定年の涙ゼスチュアにはあらず
妻で寝て母で目覚める繰り返し
昂奮したわたしへ遮断機が降りる
関 美子

バツクミラーに寂しい女は私か
嘉数千代香 小谷葉子

捨てた村へムチ打症で舞戻り
雑布がかわいて愛の破局くる
エプロンをつけると姑の老婆心
カメラには風景ばかり一人旅
おでん鍋汚れておでんらしい味
嘘つきの見本電話でママが見せ
悪党の霊前に花美しい
新刊書繙く思い旅前夜
嫁ぐ日の近し朝寝も許るさるる
ハンサムなだけのお方で忘れられ
村松酔少 大矢十郎 武内雅堂 藤田頂留子 大木バット 中谷利美 岩井本蔭棒 三宅不朽 行天千代 花田繁子



川村好郎選

富田林市 木村弥栄子

手折られて床で咲きたい花の私語
虫けらも足げにされれば構え出し
足跡を残さぬ恋をする四十路
人生の一節となつて愛は去り
キメ荒い妻で慰めの場にならず

島根県 堀江芳子

不二田先生のお見舞を受けて
病んでまた倅せな日よ夢かとも
目を閉じて過去追う時は負けと知り

また誰か看護婦さんの走る音
爪切って生きる喜びかみしめる

女患部屋オーデコロンも匂わせて

尼崎市 中谷利美

つまずいた罪は小石に着せられず
経験に物を言わせて先走り

安眠防害だとは知らない猫の恋

もうろくはお互いさまと負けていず

入歯とも知らずに凝ったご献立

鳥取県 鈴木村諷子

筆不精な妻にたしかな記憶力

公僕の見本のように愛想よく

苗代がとなり合つてるなじみにて

梨の人工交配心はいつか蝶になり

憤懣を日記に書いて寝るとする

島根県 安達潮音

巡礼へ老の身はてる夢描く

風呂たきが専科となつて古稀近く

老の集い思い出の恋も生き

子に頼る心さもしと思う意地

メーデーへこれが参加と鍬をふる

岡山県 嘉数千代香

子に注意せられ年齢だナと思ひ
ボケットの握り拳よ明日がある
落日へ今日のわたしをたしかめる
ぶちまけてはならない姑の籠である
終点へ私の柄を織りつづけ

大阪市 大 住 文 子

もう一つ此処らにほしい道しるべ
ひと言が多すぎたかと寝付かれず
ためらいが無駄に終って返事来る
座を抜けた涙を星に見つけられ
綻びた心縫う糸又もつれ

松原市 守 屋 万 竿

惜しまれて去る人のあり花便り
転勤を宿命と見ず浮き沈み
勇退と云われても幕下り切らず
俺でなく椅子が仕事をしてた悔
顔見せぬ机声なき抵抗か

八尾市 高 杉 千 歩

満ち足りた幸せ子と画くお堀端
調度みな揃えてめとる夢でさめ
乗り合せ老のぐち聞く旅ひとり
一波二波スト馴れというズック靴

水ごけの石ひとかけらを大事がり

祖父墓参（二句）

大阪市 小 谷 葉 子

日光を浴びても冷たき墓石かな
世の波に朽ちた土蔵に蔦は芽え
一本のレールに愛をしたがえて
素直に答えて唇の渴き

叔父秀一著（愛のしがらみ）

喜寿祝う処女作青春の血がたぎり

鳥取県 林 露 杖

耕耘機の音も寂しい過疎の郷
虎杖を折れば幼き日の音が
恋知った娘と母の目が見ぬき
旅の宿妻を女の夜にする

守口市 岸 本 豊 平 次

十円の按摩はつばを外れてた
店員の無愛想閉店前の混み
危なげのない遊び場に子は寄らず
子供の日ケーキですませるまではよし

米子市 石 垣 花 子

見舞客だけへ笑顔見せ初め
生きて居る証痛みの突走る

重傷も八十路の母を持つ執念
白鳥も汚れはしまいか堀の水

大阪市 阪上 十止庵

老いてなお子らに頼れぬ汗の日々
はかなきは酒で得し友禁酒して
顔だけは年上でない化粧して
月賦なら文化生活できる国

竹原市 楠貞子

詩心の筆は孤独になって持つ
敗北の私に春がうらめしい
童謡を歌って妻の何想う
仕事着のままで小さく春の街

島根県 志賀美栄

嫁ぐ娘に老の佗しささとらせず
一人旅燃ゆる緑にとけながら
減反を知らぬ雀にある期待
見まわせば幸せ薄き人ばかり

寝屋川市 福富隆子

連休が親孝行の真似をさせ
散髪の値上げと逆にうすくなり
テレビ料理見ては私に文句つけ
再職へ乾布摩擦も復活す

島根県 錦織文子

葉桜よこのすばらしい息づかい
初夏に降る落葉の音や峰寺坂
友情へ過去の素顔を取り戻す
癒ゆる日を信じる母の細き腕

島根県 神原秀子

麦笛を吹く子もなくて夕暮れる
男ならあれもしように云えように
名も知らぬ鳥も番で朝の庭
木の根っ子果報は床の座にすわり

大阪市 黒田真砂

仮縫いに春の息吹きを吸う鏡
造花の彩も翳りて心淋しい日
冷たい眸に会って友情の脆さ知り
女の脆さ見せて水中花の濁り

鳥取県 山形春海

鳥取砂丘にて（二句）

はるかなる砂丘大志を抱かしめ
靴下を脱いで五月の砂丘行く
わかめ売りあけっぱなしの出雲弁
スラスラと言えとお酒に教えられ

氷見市 関美子

ジープンの云い草ママは苦勞性
ものもらい作ってまでもつけまつ毛
兄いもうとたして二で割るそんな欲
悩みそれぞれに大中小ジョッキー

羽曳野市 今井 岳太

独酌のひと恋しさも味のうち
少年の日の足どりで師を訪ね
恋してるほてりもまじる酒の酔い
遠い日のはしかの如き初恋よ

竹原市 三宅 不朽

せく旅のころ木曾路わすれさせ
母といる信濃路まるく雲動く
なぜ熟れた苺よ恐くないのかい

岡山県 山田 止水

屁理屈の言える息子を頼りにし
要らぬことと思ひ出させた妻の愚痴
香典を相談をする他人の死

大阪市 柳 原 静香

聞えない甘えが何時か身に染まり
耳は病むとも憎まれ口はまだ負けず
中年の重みで朝の靴を穿く

大洲市 堀 内 曉 風

美しさ手折って見たい他人の花
救援の山彦だけが帰って来
本心を明かさずすねるのも女

橿原市 岩 井 本蔭 棒

二人連れ乗せたテールのしみる赤
祝盃へ不覺涙の一滴
マイカーで来るんじゃない酒が出る

藤井寺市 古 結 百 水

お若いと言わせ度い菊の齢を言い
造反の春老妻薄々知っており
花の留守番上げ底の土産来

羽咋市 三宅 ろ 亭

せめてもの行今日も正信偈
偶に出る靴定退光らせる
五反歩を定退男もて余し

大阪市 平 井 露 芳

真似だけでオウム自分の歌知らず
お手盛りのように新聞値上げされ
囃った怪復元誰もしてくれず

小松市 村 井 城 南

これしきの事にも腹立つ病み疲れ
看護婦に叱られている五十才

おや君もかと病院で齡にふれ

(前月分)

竹原市 楠

貞 子

カロリーを言うてテキ肉買いしぶり
大掃除亭主関白とは見えず

雨の日も晴の日も春恋樂し

松江市 興

富 喜 子

おふくろの味なつかしと子の便り

嫁とってまた戸籍から一人へり

メロドラマ停退の夫とみる真昼

竹原市 生

信 笑 子

この道を行こうふり向きはしない

モナリザの笑いへ私も笑ろうてみる

坂道だけれど二人だけの道

羽曳野市 麻

野 幽 立

古傷にふれたくはなしバラ真紅

日の丸を掲げない家の鯉幟

石橋をまだ叩かせる苦い過去

七尾市 松

高 秀 峰

朝からの一言多い子を案じ

言い分もあろうに詫びる母強し

ミス一つ見つけ監査もお茶を飲み

大阪市 岡

本 まさひろ

倒産の家にも春は新芽出し

(古稀お祝に参賀)

かにかくに古稀迎えられし天子さま
久米仙も見あきましたとミニホット

大東市 荒 木 鶴 翠

春うらら飲み込む河馬の大あくび

試歩の子を呼んで拡がる青い空

ケロイドをなぜに消さぬかきこ雲

愛媛県 小 山 悠 泉

美德とも思う内気な娘の無口

離農する決意を乱す田が五反

アンコール出来ぬ初老をはがゆがり

八尾市 高 杉 力

わがままな人さ涙もとりあげた

長雨にイヤな奴まで想い出し

ハイミスの部屋に季節の花がある

島根県 東 原 福 子

黄昏の雲へ未来図手探り見

何も彼も包んでさりげなき友情

黙々と土を愛して明日を見ず

島根県 谷 岡 芳 枝

選挙戦(二句)

投票依頼簡簞で受け土間でうけ
里かえり満開のつつじに留守をさせ
集金日百円玉に肩がこり

和歌山県 ふきあげ 虎 城

逆立ちをしても追えない友と知り
コップ酒男に明日の灯をともし
黙ってる二人に餅の焦げる音

岡山県 武 元 柳 子

他愛ない落書のある大師堂
スムースにゆかず五月の予定表
石遠く遠くへ投げて心決め

大阪市 塩 満 敏

改札のせまい所も腕をくみ
御一行様につられて土産買い
名調子つられて登る奥の院

島根県 中 島 英 子

選挙戦見知らぬ背広に握手され
葉桜に残るボンボリ疲れ果て
逆らえばまた口ぐせの小言きく

高知市 竹 崎 寛

春宵価千両一句まだ

春の風ちゅうぶらりんの僕である

ごりごりと抜かれゆく齒にある未練

大阪市 河原林 比呂路

うっかりと聞けぬ唇朱いひと

古釘は二度のつとめと拗ねてみる

うすい胸ばかり来よるとレントゲン

大阪市 西 本 保 夫

この中に気の合うのも居る平社員

ハイミスの過去も知ってる平社員

平社員のパクには聞かぬ管理職

東大阪市 落 合 思 月

不安がる妻をはげます車椅子

ふし穴でない老妻の眼がこわい

過去問わぬ再婚同士むつまじい

鳥取市 有 田 鹿 子

春雨がふれば心が又疼き

傷心を砂丘の砂に励まされ

病夫にも見せたい牡丹ひとり見る

松江市 内 藤 喜 夫

耐えることだけが取得か平で老い

おしゃべりが過ぎて伝言つい忘れ

子には子のつきあいがある誕生日

大和郡山市 森 田 カズエ

血の凍る思いへ医者は無表情

こちらにも云い分がある仕末書

一つ屋根の下に住んで隙間風

仙台市 川

村 映 輝

連休の疲れをいやす休暇とり

収入が無くなり税がなつかしい

定期券見せれば駅員そっぽ向き

和歌山市 垂

井 千 寿 子

友の計を聞く潮騒の療養所

夫婦とは死ぬまでわからないクイズ

出張の派手なネクタイ気にかかり

富田林市 板

尾 凡 吉

倅せも涙も分かち愛を抱く

金剛登山

登山歴聞かれ無遅刻無欠勤

うぐいすが迎えてくれる登山靴

島根県 大

森 孝 華

やんわりと過去をとらえた言葉尻

ゆく春を惜み客間の訪問着

転動へ暮らしのカラー変えて生き

新潟県 高

野 不 二

デートして来たなと知れる子が帰り

夏休み未来の人を連れて来る

ランプぶら下げて喜ぶ世と交り

河内長野市 森 本 黒 天 子

見構えて見たが相手が見つからず

遠慮せぬ雨がぼたんへ音を立て

河内長野市 井 上 喜 醉

青春の暴走ガードレールが受けとめる

うまい嘘ついてもわかる妻の感

守口市 樋 口 一 峯

市議戦の前哨戦なる工事ふえ

お役所の仕事振りでは食て行けず

青森県 岩 淵 一 星

海老で鯛釣って娘と孫帰る

泥んこの足爺ちゃんに避難する

備前市 武 内 雅 堂

純粋な女の心頼りなし

不発弾抱いて乱れない女

大阪市 藤 田 頂 留 子

長谷寺 (二句)

廻廊の牡丹にツツジ負けていず

被写体になってならせて長谷舞台

松山市 谷 の ぶ お

大臣は遺憾に思うだけですみ
おれが死んだら困るぞと妻にさせ

河内長野市 小川 耕人

妻のわなかつたふりして従いてゆき
弱さもつ女核心ふれささず

大阪市 堀口 欣一

小紋着こなし美しき五十代
米丸のネタがここにもあるメトロ

大阪市 白石 良圭

明日からと云う約束が妻もあり
愛してる証拠妻の留守の部屋

今治市 薦本 昌道

詫びてすむ事でなし詫びる外はなし
浮動票伸びて人望見直され

笠岡市 山本 柏生

土の香は増産時代がなつかしい
来賓の讃辞に脂汗をかき

宿毛市 山本 窓花

団体で飲めば二級もうまい酒
幼稚園泣かし泣かされ知恵が出来

新宮市 小山 峻

紀勢線宇久井駅前で小山の釣り堀開店

釣り堀に浮かぶお客のエビス顔
はく製に化けて保護鳥百貨店

米子市 増田 竹馬

人生の夢ふくらます美術館
生きている倅せ孫にたかられる

羽曳野市 大峠 可動

今日を耐えよう空の青海の青
真っ青な海に悲しみ断たれそう

松原市 玉置 迷朗

鼻の差で哀れ虚空に散る馬券
初孫をおなかに嫁の目がきれい

新宮市 川上 久司

潮の香が少し残ったサンマ焼く
警官人形にマイカー族も慣れ

堺市 栗本 藤持

金魚売り明治の声で流しゆく
能書で買った薬が効いたらし

貝塚市 行天 千代

目出たいと素直に思えぬ母であり
大安の飛行機へお守り持たせやる

末娘嫁ぐ(一句)
鳥取県 両川 洋々

しみじみと子のある幸に氣付きかけ
どないしてみても六畳ひと間なり

和歌山市 樫

村 ふみよ

車内から花見へつづく酒となり

雨だれをうけてあき缶春の唄

呉市 槇

田 英 詩

義理で打つ拍手はテンポ狂ってる

伸び悩む芸へ世間の風当り

今治市 大

本 バ ッ ト

マニキュアの掌を合せてる島遍路

我が俚が通る次男に貰われる

今治市 真

山 国 彦

退職をして曜日から忘れ初め

ゆっくりと信号を待つ散歩道

今治市 今

井 松 花

花よりも選挙で飲める四月なり

背の子を逆さまにして潮干狩

今治市 古

野 伶 人

生きている限り夫婦の指定席

健康の為の散歩に衛生車

今治市 原

田 輝 親

創業は明治汚水を垂れ続け

定退へヒマでしようとは心外な

島根県 安 達 小茶坊

またかとは顔にも見せず祖母の愛
ご近所に不幸ストレオかけとれず

高槻市 山 田 スミ子

親切にされているから氣を使い

千円がこれだけと言う市場籠

八尾市 古 川 鶴 声

海底の神秘に馮かれたアクアラン

泉佐野市 大 工 静 子

仏前へ真紅の椿遠慮する

鳥取市 近 藤 秋 星

口先でない同情は涙ぐみ

竹原市 簗 田 浄 美

離れてることが長い夜の息

今治市 渡 辺 南 奉

一城の主小びんよいビール

豊中市 影 山 一 凡

朝夕の小言左の耳が聞き

今治市 伊 藤 一 郎

憲法は揺れて休日だけ確か

名古屋市 吉 田 文 枝

あのあのがあんまりはいり聞きづらく

きのう・きょう

本多柳志

◇時たま書店で立ち読む俳句雑誌で思うことですが、近頃の作品の中には川柳的なものが多いが、近頃というものである。併しそれは「表現が川柳的」ということであって、其の内容は決して川柳ではない。俳句と川柳との違いについては多くの人が、話したり書いたりしているようだが、未だにはっきりとした結論は出ていないように思う。

ある人は「花鳥風詠が俳句で、人間風詠が川柳だ」とごく大雑把に分けている。水府氏は「俳句では相撲（人間）を見ても自然の風物として詠み、川柳ではさくら（自然）を見ても人間との交渉を考える」と言い、また雀郎氏は「自然の向う側にあるのが俳句で、こ

職かえて名刺の肩書派手にする
捨て石となって末っ子農を継ぎ
独りごとはずませ老いの孤独理め
屋風呂に鼻唄もなく病み呆け

須坂市 高峰 柳 児

ちら側にあるのが川柳だ」と主張している。併し俳句でも人間風詠も出来れば、川柳でも花鳥風詠も出来るのであって、どこまでが俳句でどこからが川柳だという、はっきりとした一線というものはないのではないかと私は以前柳志寸言で書いたように今でも「俳句作家が作れば、何をどう詠んでもそれは俳句であり、川柳作家の作品ならばそれが、何をどう詠んでも川柳である」と思っている

◇四月中旬の朝日の文芸欄で面白記事が目についた。「川柳と俳句の相違縮む」というのだが、次のような例をあげて、卒業というあたたくつめたきもの 久子をとりにいくさ真つ平日向ぼこ 光雪達磨その日のうちに見捨てらる 政見白き足袋はけば左右より子がする早智江これらの俳句は鑑賞者によつては、川柳とも俳句とも受けとられる微妙な作品である。雪達磨や白き足袋の句は明かに川柳である。近頃はこうした純然たる「川柳」が俳句雑誌に数多く発表されている。その一方、水客名を知らぬ古寺のいらかにある温み 新春の札ひとりのものとして 奈良子

大洲市 米沢 曉 明

へドロ口く会社に儲けさせすぎた
年とって詫びが上手になっただけ
横断歩道歩巾を合やすとこでなし
教え子の子に孫どもが受持たれ

今治市 月原 宵 明

仏壇へむなしくひるのお燈明
返盃に酒が残っている無礼
言訳をする順番が廻ってき
揺り椅子へ家具部は無理に掛けさせる

春曉を覚えて孤独をかこつ冷え
霜柱踏めば故郷の音がする
といった「俳句」が川柳として発表されている。このようにこの頃川柳誌に発表される作品には、季語を入れると同時に極めて詩情に富んだものが多い。この逆に俳句誌には無季の作品が増加している。こうした皮肉な現象が、川柳と俳句の接近に、一段と拍車をかけているといえそうである、と結んでいる。

◇朝日の文芸子は俳句と川柳の相違点を、単に季語の有無においているらしい。有季川柳と無季俳句の実例をあげて、俳句と川柳の接近と見ているらしいが、これは一寸おかしいと思う。季語というのは表現上の便利さからいふなれば文章の省略から来た、独特のテクニクなのであって、同じ十七字の短詩に季語があるからとかないからとかで、俳句になったり川柳になったりするのではないと思う。先輩古方さんは本誌五月号で一茶と豆秋の作品をあげて、表現は川柳的であっても一茶は俳人だと断じておられる。同感である。

さくら鯛背に猫車きしみ行く（俳句）
さくら鯛焼かれるまでを泳がされ 柳志

路郎忌に際して

—その1—

路郎先生の手紙

東野大八

人の世とは、まさにつかの間である。麻生路郎七回忌がまたたく間にやってきた。今回はその忌日の月にあたるので、路郎先生のことを少し書いてみたい。路郎先生と初めてお会いしたのは、昭和十年前後だったように記憶する。島の内をせまい二階座敷で、二十歳を少し過ぎたばかりの私は、上りがまちのつつきで畏こまっていたのである。一句か二句抜けたらしくて、呼名をすると先生が、「大八か、いい柳号だね」とおっしゃったのを鮮やかなまでに脳裡にある。そのときの先生の印象は、髪黒々として眼がねもひげも颯爽としてみえた。後日、千日前で先生と二人で牛鍋をつつきあったとき、その所感を述べたところ、「安東で社会党代議士の麻生豊とまちがえられてな、わしの面つきが似てるので」と口ひげをなでなでおっしゃった。ちがいない、私もどこかでみたお顔だと思ったが、この社会党の斗士とご親戚じゃあないん

ですか、と真顔でいったことである。

先生とさしの牛鍋屋は、千日前電車通りの北極星で、この日の出合いが忘れられないまま、家内と二人で一泊したこともある。

「こんなヤカましいとこイヤだわ」と女房がこぼしたので叱りつけたりして――

いまの大陸川柳同窓会の口あけになった、大陸引揚者柳人の初の会合もこの一間であった。

そんなわけで、この北極星が火災に遭ったときは、石松ではないが、持ったサカズキばったと落し：ショックだった。

先生との牛鍋の出会いは、いつか書いたことがあるので割愛するが、先生の「旅人」の――いつまでも肉と葱との仲であれ――とはこのときの句境ではなからうかとうぬぼれている。

昭和二十二年四月、愛媛県川柳文化連盟が誕生し、機関誌「川柳天地」が創刊された。そのときの誌上課題吟「盛り上げる」の選に当

られたのが路郎先生で、抜句たったの三句。「選後に」と題して、この選者はつぎのように書いている。

「集句一八三句中選句がまことに少いので恐縮ですが、選句は何処までも良心的でありたい小生の微意を御諒承願います。次回にはもっと佳吟の集り、そう、出題をお願いしたい。それから集句を清記無記名で送られたことだが、これは選に公平を期する意味かも知れませんが、それでは選者は単に選句機械にすぎない。私は名があるのが無からうが、感情を交えた選はしない。作家の句が五句あるとすれば、その作家の思想もはばわかるし、少々きずがあってもその中から表現上の添削もして、一句でも採ってその作家の行くべき道を示してあげる親切さができるわけである。」

当時、この選句が私の周辺でかなりの論議を呼んだことであるが、私は私なりに、この潔よさは小気味のよいものと感得され、かつ

ての日の颯爽たる島の内の句会の先生の風貌を想い起した。

昭和二十七年一月の私あての路郎柳箋一。

「すげ笠の特選とやら、小生も金をやるからやってくれといわれたが、僅かな金をもたらわなくてもやってあげてもよいが、あのやり方が面白くないので断ってしまいました。ところがそれが三太郎におちが回った次第。私の意見は、特選雑詠は紋太君一人でいいと思う。それを水府、雀郎その他の数名が、僅かな投句者を相手に、女郎の張り店然と並んでいるのはつまらない。それも各選者の投句者が違っているのなればとにかく、同じ投句者がどの選者へも投句していて、それぞれ紋太向き、水府向きという句をものにしているのは、選者は選句機械で、僅かな選句料をもらうのに過ぎない。私にはそんなバカなことに費す時間はない。選者はすくなくともよい作家を育てる意味で句を選すべきだと思います。選者向きの句を作るといおう道楽の相手など、僕は持てといわれても持てない。東京の柳一人が、番衆だの、すげ笠だのという型にはめて選をしてもらいたくないといふのはもっともな話です」

昭和二十八年十一月付私あて柳信一。

「新聞協会報の『川柳こそ新聞の世界』を拝読いたしました。私も貴方同様の意見をもっています。(中略) 講談社の講談倶楽部の柳壇を劍花坊と私が隔月交替でやっていました。そのころ、和歌は佐々木信綱、斉藤茂吉。詩は北原白秋、野口雨情。俳句は高浜

虚子と河東碧梧桐でした。もう佐々木氏と高浜氏と私だけしか生き残っていませんが、私ももうしばらく仕事に熱中したら第一線を退くつもりです。そして仕事は山程あるのです。新聞柳壇も骨の折れる間、自分がやって、ぜんじあとのやれる人に譲って、柳界全体の隆昌を図りたいと思っています」

「長くても短かくても、文というものは生命力が躍動したものでない意味はありません。それは新聞でも雑誌でも柳誌でも同様です。とくに句に対しては、僕はいつも若い人を激励して、老人連の句風がすべだと思つて真似してはダメだ。自分の呼吸でやれ思ふ存分自分のものを出し切つて作れとすすめています。脱線や思い上りは困るが、実力のある作家なら、少々の脱線もかまわんからしかりやれとすすめています。(中略) 私はどは作家から退いてもいいと考え、専ら川柳の研究一本に追いやつて欲しいと誰かに叫びました。それになります。しかし、雑誌の経営という指導面に人がいないので、やむを得ず私がかん張っている始末です。

それとも雑誌をうまくやってくれる人があれば、もう一度作家として出直してもいいと思うのも本心です。もっともこの方は気だけではダメだと思つていました。しかし、もう少し思索する時間が与えられれば、いま少しはすぐれた句境に入れるという自信だけはもっています。それだけにすぐれた作家の句を認める力には、不足はないと自負している次第です」

昭和二十七年九月来信。

「編集企画に対していろいろ御指示をたまわりあつてお礼申し上げます。小生もいろいろ企画をしています。大將がいて兵隊がいなというのか、うまくやってくれる人は遠地にいるという有様で、なかなか実行に移すまでに日がかかり、お目だるいことと思つています。(中略) 企画も時事吟だけは企画したことはありません。特に時事吟を募るということとは新聞の仕事で、専門誌としてはどうかと思うのですが、如何でしょうか」

路郎先生からのおたよりは、昭和二十一年暮にはじまり、お亡くなりになられるまでの約十七年間ほどに封書八十二通、ハガキ三十五通(以上保存分)となつています。長年月からすれば多い方ではない。しかし、昭和三十一年前後の私信には、人間路郎の処生の哀歎が川柳をめぐつて実に躍如たるものがある。淡白な底にも測々と訴求する身辺の感性豊かな表白は、私のようなマスコミ職人のその場そのとき限りの書きなぐりとはまさに対象的である。例の典雅な名筆にのるペンの跡は、変色したインキの味と、風化した黄色い用箋の紙質にうまうマッチして、表装にでもしておきたいほどのものもある。

路郎先生は活達な運筆家だと私は思う。流露する感性にどうしようもなく筆を投げるという態の中の一筆こそ、私は達文だと考え、それでこそ人を打つのだと思う。

路郎川柳にもそれが通じている。

私事や、公表を憚るものは載せたくとも一

切實愛したが、うず高い先生の書簡を、いま改めて一読し、先生の生涯をかけられた、私のいう川柳バイブルである「旅人」に眼を通

「川柳の社会化」

路郎師の遺志

戸田古方

日本二千年、中国五千年、エジプト七千年といいますが、この長い歴史を通じて、人間はたして進歩しているのでしょうか。

昭和の始めに見たドイツ映画「メトロポリス」では、人間が全く機械の奴隷に成り下がっていました。

ついでの間まで驚異の復興を自他ともに誇っていた日本が、「進歩と調和」と看板をかけて万国博を開いた去年から、皮肉にも、まるで足もとから鳥でも飛び立つように公害、公害といひ出しました。

どれもこれも、事実です。科学にそっぽを向けるではありませんが、われわれは、厳しく人間不信や人間性回復を、今、口にしだしているのです。

我が師、路郎先生は、畢生の念願、「川柳の社会化」に邁進してこられました。その目的は全人類の幸福にあったのですが、あ

すとき、私は千万無量の感慨のうちに、先生こそ真の川柳詩人なのだと改めて銘記したことであった。

—その2—

るいは、これには考え方の飛躍だと抵抗する人もあるでしょう。それで、この機会に、少し吟味してみたいと思います。

私が先生に始めてお目にかかり、川柳へのご縁をいただいたのは三十三年前の昭和十三年、丁度七月、その第一日に伺ったのが「川柳は人生批判、社会批判、人間陶冶の詩」ということで、滑稽や皮肉だとは仰言いませんでした。それらは批判の中から自然に産みだされるからです。何よりも大切なことは自らを正しく見、さらに掘り下げることなのです。われわれは平素、まるで節穴のように少しも正体を見極めようとはしないからです。従って、真実とは何かを知らなさ過ぎるのです。

先生の仰言しやる「批判精神」に徹すると今まで思っても見なかったものが見えてきて、自分の愚かさを反省し、自分の罪の深さ

を懺悔せずにはいられなくなるのです。それが、われわれを高め、陶冶して、より大きな幸せを掴むことになるからなのです。

ところで、川柳は十七音字の詩ですが、この七五調は日本人が先祖以来好んで伝えてきたリズムです。それは和歌・短歌に始まり、上ノ句、下ノ句と分れて作句されて連歌・連句となり、俳諧へと進みました。その発句から今日の俳句、付け句から川柳が生れました。発句は自然詠の約束にしたがっていましたが、それで俳句には自然的要素が強く、川柳は人生詩の性格を育ててきました。いずれも日本人の詩でありますが、一見すると、詩的なのは俳句の方だと思いきや、いづれも少ないようです。俳人は一般に大へん丁寧な美の探求に身をいれていて、川柳は素裸すぎてうっちゃりにしすぎているとも申します。しかし、飾りのあるなしが詩の価値を左右するものではありません。俳句は高尚だが、川柳は下品だと思われてきていましたし、今でもそう思っている人も少なくないでしょう。

路郎先生が「川柳の社会化」という巨火を掲げられた理由の一つはこんなところにあったのかも知れません。先生は具体的な認識の道しべとして「人生批判、社会批判、人間陶冶」というサブタイトルを付けられたのです。

最近、俳句の秀句というのを見ますと、単なる自然をよんだものから、人間が、人間の苦悩がちらついていた句が多くなりかかっています。俳句の川柳への接近ともいえましよう。

この複雑極まる人間の心をからませてこそ人間の作る詩であり、情操の浄化も果せるのです。人間の幸福は外から与えられるものではなく、自らのうちから産み出されるべきものなのでしょから。丁度、青い鳥が自分のうちの窓辺で発見されたように。

まず、自らを自覚し、自分の正体を見極めてこそ、周囲の真実をも間違ひなく把握することもできるのです。「川柳の社会化」はここに礎石を据えていられるのです。

川柳を学んできて私の得た最も尊いことは、ものをできるだけ客観的に見ることを習慣づけられたということです。世の不幸の大半は主観に溺れることからきているのだというようなことも解らせていただけるようになりました。色眼鏡をかけて見ている人の何と多いことでしょう。それは事実であり、事実であればこそ、真実がどんなに見落されていくかということも、また、悲しい事実です。川柳は素肌の人間に触れます。それだけ、こうした客観的な修練も場数が踏めるということです。それにしても、川柳人口は俳句のそれに比べて多いとはいえません。新聞その他ジャーナリズムの取り上げ方もそれに準じております。

川柳を愛し、川柳に打ち込まれた、そして、川柳の人間の幸福への役立ちを考え続けていられた路郎先生が「川柳の社会化」を叫ばずにいられたかった理由が痛いほどはつきりするのです。

翻って、先生の遺髪を頂くわれわれ、声咳

に接しられた方も、そうでない方も、一体どうすればよいのでしょうか。積極的な社会化運動をも忘れてはなりません。が、誰にできる、なさねばならぬことは、作る一句、一句に、もつと丁寧に人生批判、社会批判の心をみながらすることです。作る人とともに、選ぶ人には、その心は尚一層大切でしょう。だからといって、あまり露骨では魂を失

—その3—

松に従いそろかしこ

不二田一三夫

故麻生路郎先生が、川柳でプロとして全うされたことは壯絶そのものであった。が、その嵐の道程を、家と子を守りながら、半世紀以上を共に歩まれた蔑乃先生の内助ぶりは、大きく柳史にのこるものがあるようにおもふ。

路郎・蔑乃先生は、大正二年四月九日に結婚された。路郎先生が二十五歳（明治二十一年七月十日生）蔑乃先生が二十歳（明治二十六年二月二十四日生）の時である。故岸本水府先生は当時二十一歳（明治二十五年二月二十九日生）だった。

なぜ、ここで水府先生の年令まで書いたかというと、そのころ東北から出ていた柳誌、

い、詩ではなくなります。着想、発想、推敲の、只たゆまない努力のうちに積み上げていくより外はありません。いわば、全体的な人間形成を重ねると申す方が正しいのかもしれません。人間陶冶が向上するとともに、その目標に、歩一歩近づけると信じて疑いません。そうして吐かれた句こそ「いのちある句」にはかならずと申せましょう。

「猫柳」（蔑乃先生にうかがったが「猫柳」だった？と思う、とのことだった）に、路郎、蔑乃、水府三先生の誤った記事が二、三行出ていたそうで、その記事を否定する文を書くため、番第二号を持って、水府先生が新婚一週間ほどの路郎、蔑乃先生の新居を訪ねられたことがある。この誤まった記事の内容はつぎの機会にゆずるとして、

「識者を恐れる」——路郎先生と、「めくら千人」——水府先生の名言が遺るのである。（路郎・蔑乃先生談）

現在の天番雑誌も、当時は二百部でいどだったらしく、（創刊号は大正二年一月号、その年の四月に路郎、蔑乃先生と結婚）編集担

当の水府先生が、その日、その番傘第二号の送本を路郎、霞乃先生に手伝っていたのだとか、これは水府先生からうかがった。

当時の水府先生は句会メンバーの最年少者で、「力弥」というニックネームがあったほどの美少年だったそうである。これも路郎、霞乃先生からうかがった。「力弥」とは「忠臣蔵」の大石蔵之助長男の主税（ちから）役で若衆番の美少年。

美しいといえば霞乃先生の句集「福寿草」に、長女の純子さんとうつした口絵写真があるが、この写真を見てわかるように、新婚時代の霞乃先生は、さぞ美しく可愛い方だったと思う。（この写真のバックは白くなっているが、お二人のうしろに野口雨情先生が立っておられたのを白くつぶしたものである）

霞乃先生は尊父・河盛芦村氏に連れられて、故西田当百氏（番傘川柳社の前身、関西川柳社生みの親）宅の小集句会に出席し、そこで路郎先生との初対面となり、やがて結婚へと発展するのだが、当時の霞乃先生は十八、九歳の文学少女であり、かてて名門河盛家の令嬢ともなれば、若い川柳家たちの話題の中心になったことが想像できる。

霞乃先生の曾祖父にあたる「河盛にへい」氏は、屋号を「河内家」といい、大きな木綿問屋だった。当時和船三十数艘に木綿を満載し、日本海から北海道へ渡り、戻りの船には昆布、鮭、鰯、数の子など、松前名物を積ん

で帰るという豪商だった。ある時は暴風雨にもまれて難航したり、スリリングな劇的なシーンも何回かあったそうだが、この盛大な河盛家のことは、「母方の祖母や他人様から聞いたことで、父の芦村は無口な人だったから自分の家に関することは何も教えてくれなかった」

と、霞乃先生はいわれる。「河盛にへい」氏は、神社仏閣に多額の寄付をしたり、堺大寺の塔が神仏合体の時に持ちなやんでいたのを買い受け、それをまた寄付するなど、功德の多い人だった。

道で雨にあうと「かわに」さんへ行けば、いつでも傘を借してもらえるというくらいで貸し傘が何十本も用意されていたという。

土蔵が七つもあり、その一つは薬師倉といつて、仏像が数知れぬほどあったそう。

これらの話は、霞乃先生が奈良県桜井高等学校（その後、相愛高等学校へ転校、同校を卒業）へ通学していたころ、学友の父が寺の住職をしていたが、その人から聞かされたそうである。この住職が「かわに」で一泊したことがあって、しかとその目で見ての述べたこと。貧困学生には援助の手をさしたのなど、その美談は数えきれなかった。

だが、二代目になってからは、相撲とりが入りしたり、キレイどころが、事あるごとに大挙して揃いの前掛け姿でサービスにあたるなど、また日本舞踊の舞台まで邸内にあったり、およそ商人らしからぬ生活がつづき、そのうえ他人の判をしたり、事業は人まかせ

というにいたっては、さしもの大河盛家も没落一途をたどるよりほかなかった。

初代が残したものは、明治天皇が堺へこられたときに建てた純日本式の門構えの家だけだった。明治天皇が一泊された記念すべき家だが、それも人手にわたり、のちには堺市の保管するところとなった。だが第二次大戦で灰燼に帰した。

尊父河盛彦三郎氏（芦村）は、前記「かわに」から分家した河盛庄七氏の長男で、庄七氏は種油の間屋だったが、芦村氏は家庭的なある事情で相続権も放棄して「だんづ」の商人になった。しかし文学肌の人だったため商法はゼロだったようである。

芦村氏は作家を志望して渡辺霞亭（元治11・大正15・4・7）の門をたたき、時代小説へペンをとられた。霞乃先生三歳の時である。

筆名は河盛蕉亭。だが一作も活字にその筆名がなかった。というのは霞亭の代作ばかり書いていたからである。

ここで芦村氏は小説で身を立てることの困難さを知り、ついに筆を折って教鞭をとることになり、アルバイトに数学の塾を開き教育者として再出発されたのである。

霞乃先生に叱られるかも知れないが、数学の先生を父上にもたれながら、なぜか霞乃先生は数学には弱い。多くの数学の弱いのは伝説になっているくらいだが、霞乃先生と句会などで金の計算をすると、ほとんど合ったことがなかった。（これは何かの時に書いて

た)

芦村氏が三十になるやならずで、霞乃先生の母堂は逝去された。霞乃先生六歳の時である。

これを霞乃先生は、「父は若くして妻に死別しました」と表現される。ぼくが孫のことを娘の子と表現するのと、何が通じるものがあるのだろうか。

霞乃先生は六歳から尊父と二人きりの生活になった。芦村氏にいくら後添いをすすめる人があっても、霞乃先生のために終生ついに後妻をもらわなかった。

「父は私の父であり、母でもありません。登校する時は、おさげ髪を梳いてくれたこともありました」と、美しい父娘が目にかぶようである。霞乃先生の八歳の時に英語を習わせるなど、芦村氏は進歩的な方だった。

(ぼくの娘二人は生野区のブルー学院の卒業生だが、霞乃先生は同校の英語専修科、高等科第三期卒業生で、娘たちの大先輩である)

芦村氏はご自分には厳格な方で、とくに時間には正確な人だった。二時に帰るといって外出するとキチンと二時に帰宅された。そのころには短篇小説を書いたり、俳句や川柳も作っておられた。

ここで話がふり出しへ戻るのだが、霞乃先生が川柳の句会へ尊父と共に出席して、妻や待たん靴音を高めんか

と、路郎先生から名句をひきだし、
福寿草松に従いそろかしこ

と、霞乃先生の柳名を高からしめることになるのだ。(路郎先生の旧号は干松といった。松に従いの松は?)

作句をはじめられたのは路郎先生が十六、七歳(明治三十七、八年)、霞乃先生が十八九歳(明治四十四、五年)のころだそうである。

×

新婚当時の家―新川崎町で、造幣局の近くだそうだが、当時路郎先生は大阪中央郵便局で外国電報検閲係をされていた。この新居は一年たらずで転居されたが、水府先生が「番傘第二号」を持って行かれたのは、この新川崎町時代である。

第二転居―福島だが、霞乃先生はほとんど記憶がない。ここで長女純子さん誕生(現東京都在住)

第三転居―常安橋通りで、ここでは古書販売業をされ、屋号を「葵書店」といった。次女御世子さんと三女御幸さん誕生(御世子さんはここで夭逝)。

「雪」や「土団子」が発行されて、斯界の注目を浴びたが、霞乃先生は過労から健康を害され、古本屋を廃業された。

第四転居―萩の茶屋三日路時代、同じ町の四、五軒先きに岸本水府先生の新居があり、また木村半文銭氏の家も近かった。ここで長男ロンドンさん、四女奈那さん誕生(大阪在住) 御幸さんはここで夭逝。路郎先生の新聞記者時代で、外国為替の研究に没頭されていたところである。

第五転居―鳴尾寺の後、路郎先生は外国為

替の研究を中絶、著述業として立たれ「川柳雑誌」の創刊号が世に打って出る。この家で次男アトさん誕生(現、奈良県で霞乃先生と共におられる)ロンドンさんと夭逝。事務所は杭全(くまた)町にあったようである。

第六転居―岸の里時代。三男一歩さん誕生(大阪市在住) 尊父河盛芦村氏逝去。路郎先生は桃谷順天館広告部に就職されていた。

第七転居―玉出本通りで喫茶店「キング」を経営。川柳雑誌の事務所を杭全町からしばらく谷町九丁目の増井氏宅に移してあったのを玉出へ引き上げたところである。四男洋さん誕生。(一年ばかりで夭逝)。

第八転居―堺湊。事務所を江戸堀昭和ビル内に置き、霞乃先生が弁当持参で出勤されたころである。

第九転居―住吉区万代西五丁目。路郎先生はここで雲の峯へ旅立たれた。

戦時中は伊賀上野市から約一里は離れた一の宮妙慶寺に疎開。終戦後は路郎先生と一歩さんが万代へ帰り、川柳雑誌の仕事をされ、霞乃先生は大和の宝生寺一本松の頓光寺へ移り、ここで田園生活をつづけられたのだが実に未曾有の食糧難時代だった。玉出時代までには何度も転居され、路郎、霞乃先生の川柳に対する情熱や、その生活記録は正に破らん万丈だった。

スペースの都合でメモ書きのようになってしまったが、霞乃先生を知る何かの参考になればさいわいである。

川柳五十三次 (一〇)

富士野鞍馬

14 吉原

吉原宿は、原より三里六丁(一一・四キロ)江戸から四十里といわれ(正確にいうとそうでないが)

吉原の四十里先はけちなとこ

と川柳は詠んでいる。

江戸の吉原といえば、繁華な遊里である。東海道の吉原をそれになぞらえて、

親父も吉原宿には度々とまり

と詠み、また、

江戸の富士吉原宿へすべりおち (二三〇)
富士道者下向吉原泊りなり (二〇一)

江戸浅草の富士浅間社を富士山に見立て、遊里の吉原を吉原宿として洒落ている。

吉原の西河岸からも左富士 馬石(八九八)と左富士も詠まれている。十返舎一九の「膝

栗毛」に

「やがて元吉原を打すぎ、かしわ橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見へて、すそ野第一の絶景なり。」

とあるように、富士山が正面に見えるので、道が曲ると、それが左の方に見えた。それを「左富士」といって、

雲助は富士を右にし左りにし 能免(三二)
左富士暫く首をため直し 英蝶(二五三六)

と川柳になっている。

これから富士川を渡るまでに、曾我兄弟を祀る小祠があるので、

不二の裾貧乏神の宮もあり

洗路(二九ス九)と詠まれている。曾我兄弟は貧乏といわれていた。

広重の絵に「名物山川しろ酒」の看板のある茶店が描かれてあるところを見ると、白酒

が名物であったようである。

15 蒲原

吉原より二里三十丁(一一・一キロ)富士川を渡ると蒲原である。富士川は日本三急流の、治承四年(一一八〇)平維盛の大軍が、水鳥の羽ばたきを、源軍襲来と思ひ、狼狽して逃げたという史蹟である。それを川柳はおもしろく、

富士川はほんの赤恥かいたとこ

菅裏(四三〇)

平家方寝耳の水の鳥で逃げ

青志(九三三)

寝耳へ水鳥人波を打て逃げ青志

(二二六)

富士川で三味線を折る白拍子

(三三八六)

水鳥の加勢赤旗追ちらし

嘉柳(二二四)

源氏方ふじ川以後はかまがきれ

(四一八)

ぬかぬ太刀とは藤川でいひはじめ

鳳頭(二七三〇)

腹をかかえて富士川を源氏越し

里遊(四一一)

などと詠んでいる。

広重の絵にもこの富士川の舟渡しが描いてある。

16 由比

蒲原から一里(三・九キロ)で由比の宿である。由井とも書き、慶安四年(一六五一)徳川幕府革命を画策したが、露頭して自殺した由井正雪は、此処の紺屋の息子といわれている。

あさつてといつて七書を読んで居る

(二六四)

紺屋の息子あさつてにして亡び

鼠弓(傍三六)

雪のかたまりあさつてにしてとける

鼠弓(傍三二)

紺屋の子あさつてにして腹を切り

玉章(五〇八)

などと川柳に詠まれている。「あさつて」は

紺屋に利かせた作である。

興津との間に、東海道の難所の薩埵(さつ

た)峠がある。

親知らず子知らずさつた峠なり

鱗(四九三)

昔、心よからぬ婆さんが、息子を江戸へ働

きにやつて、薩埵峠で追剥をしていた。ある

日、若い男が通りかかったので、その男を殺

してしまった。殺されたのは婆さんの息子で

あった。それでこの薩埵峠を「親知らず子知

らず」という。

焼餅が過ると薩埵峠なり

海月(二五二)

薩埵迄三下り半の間屋帳

叶(二四〇三)

親知らず子知らずさつた跡で出来

虎丸(一〇六)

女房が聞くと禁句な峠なり

春風(八〇三)

これらの句は、薩埵を「去つた」にかけて

離婚を詠んでいる。

この峠は細い坂道で、海の方は断崖絶壁

で、今でも危険を感じる。それで、

水瓶のふちを鼠の薩埵越え蛙柳(二六六八)

とも詠まれ、「名所記」に

「明暦元年(一六五五)九月に朝鮮より使

官来朝せり。この為にさつた山を開きて海

道とせられたり」

と書いてある。

峠の東麓に倉沢という立場があり、さざえ

の壺焼が名物であったので、

さざえが海へぶちこむがさつた坂

の句がある。(二一三)

17 興津

由井、興津の間は二里十二丁(九・二キロ)

で、海に副うた街道である。この辺の海を清

見瀉といつて、昔、大陸からの船はここへ来

たのである。

天人も唐人も来た清見瀉

青露(四四一)

清見瀉あたりへ徐福船ををつけ

琴我(三五三)

徐福曰く駿河へはどうさんじます

自慢(六三二)

時知らぬ山をたづねて徐福来る

青露(四七〇)

秦の始皇帝の使者として、不老不死の霊薬

を求めに来た徐福も、清見瀉へ、富士山を目

当てにやつて来たという伝説がある。

この清見瀉のつきあたりが興津で、昔、清

見が関というのがあった。そこに建立せられ

たのが清見寺で、弘長元年(一二六一)関聖

禪師の開基、臨濟宗妙心寺派の名刹である。

ここから三保の松原、富士山を眺めるのは絶

景である。

清見寺目馴れてひくき不二の峯

島水(二二七)

墓水に富士一つずつ清見寺松丸(二五三二)

と川柳に詠まれている。

清見寺門前に「清見寺膏藥」といって、吸

出し膏藥を造つて売る店が幾軒もあった。こ

れが有名で、道中の土産にもなった。

松脂匂ふ清見寺前

(武初五)

根太から話のつづく清見寺

(武一一八)

かうやくを張かへて居る興津川

(武一一二)

等の句がある。

歌枕たけ興津をば寝ずにたち

偶中(二六五)

は「興津白波」をかけて、ゴマノハイを詠ん

だのであろう。

この海でとれる甘鯛を興津鯛といつて、

庖丁もむざとつかはぬ興津鯛(武一六四)

という句がある。

★六月号三島の項の末尾「永承五年頃能因

法師は……」から最後まで二十三行を削除

します。能因の雨乞いは伊豆でなく伊予で

した、筆者の思い違い、お詫びします。

手さぐり

高橋鬼焼選

目隠しをした手さぐりがじれっ
手さぐりの搜索続く雪の山 宵明
手さぐりの的はとつと逃げてい
手さぐりでやつと見付けた非常口 軒太樓
手さぐりの 明日へ一票信じ切る 魚山
手さぐりの 返事を探す聴診器 十止庵
手さぐりの手さぐりまんと月が出る 初甫
手さぐりの 先に女の膝があり 七面山
手さぐりが今日のプランを狂わす 季賛
全身を指にあつめて 文字を読み 一治
当分は 手さぐり 新任地へ赴任 素身郎
手さぐりの 小石がだます潮干狩 ふみよ
手さぐりでやつと弾も子ノギター 緑水
手さぐりでわかる 所へ白い杖 伶人
盲目の人 手さぐりの 感がさえ 魚山
手さぐりで栓を抜いとく仕舞風呂 初甫
手さぐりの 積りで冗談言つて見る 七面山
手さぐりも入れてチップの胸算用 一郎
新任はまた 手さぐりで 判を押し 木魚
眼帯へ 手さぐり 戦地の勘が生き 春海
手さぐりの ような暮しで子は育ち 止水

手さぐりも生きていまつせ釜ヶ崎 洛酔
手さぐりの 指へ押しピンつ 隆子
手さぐりで 来た 人生の 長い坂 利美
手さぐりへ 教える方も 骨が折れ 悠泉
手さぐりの 愛へ女が 賭けている 克枝
手さぐりの 謎にまんとひつかり 古心
手さぐりで 見つからなんだ画紙 不二
点字 読む 指が 頁に 生きている 甦光
手さぐりが 思わぬものを つまみ上げ 英子
腹巻の 金 手さぐりで 確かめる 春海
手さぐりへ 棚から落ちた 太い音 曉風
手さぐりで 教える母も うる覚え 静歩
貴重品 母手さぐりで 出してくる 十止庵
手さぐりによやく 馴れた頃に 点き 洋々
手さぐりの 捜査 徒勞の 重いくつ 翁童
手さぐりに 今夜鍵穴 すねている 親
手さぐりの 尻が濡れてる 干汐狩 城南
手さぐりに 不意に 点した 灯が 恐い 柳子
佳
手さぐりの アンマ 停電とは 知らず 洋々
整頓の よさ 手さぐりで 探して 曉明
台所も 手さぐりの 主婦の 城 初甫
手さぐり 同士 握手に 心通わせる 三十四
手さぐりは 楽し 兎の 輪で 鬼になり 代仕男
頼まれた 留守 手さぐりの 用が 出来 笑風
地
手さぐりへ 魚信が ぐつとくる 夜釣 酔々

女 難

仲 どんたく 選

天
手さぐりへ 光 こんなに 有 難し 南 奉
軸
手さぐりの 歩巾へ ほしい 月 あかり

女難には 遠くくらしが たくましい 千 翁
春の 宵 女難に 出 会え へん じゃろ か 三十四
太 閨も 女 難で の ぼる 淀の 城 逸 名
鶯を 啼か せた 祖父の 顔の 皺 カズエ
もて 過ぎて 段々 瘦せて ゆく 女 難 七面山
解決の 緒 女 難の 匂い する 古 方
女 難とも 知ら ずにか ちエンゲージ 潮 音
死には った 女 難も 消えは った 静 歩
女 難 以外 の 辛 酸は なめつくし 素 身 郎
ドンファン 気 取り トコト 貢が 露 杖
女 難には 遠くも 妻 だけ 妬 いて くれ ふみよ
女 難も う こり ござ った 筈の 恋 洋 々
アルサロ でも 女 難の ツケが 来る 保 夫
父ちゃんに 女 難は 無い と 見く び 輝 親
男性の アナ 場 女 難に 会 いに 行き 伶 人
旅 先 の 女 難 尾 緒を つけて 言 い 松 花

一生の女難 女子大出をもらい 国彦
百難の中で女難とは嬉し バット
没落と共に女難も又去りぬ 迷朗
人生の央へ女難が別居させ 英子
女難でも遭遇したい 倦怠期 洛醉
女難など関係はなし 銀を振る 敬一
女難とは縁ない老いの日々暮れる 隆子
だまされる 程の女に まだ会えず 白汀
四十を使い 込み さす赤い爪 城南
おみくじの女難を妻にわられる 智司
金難も 女難もなく 過疎に住み 秀峰
女難の相信しネクタイ今朝も替え 綾女
結局は落付くところへ来た女難 いわを
女難には 遠い 夫でもの 足らず 耕人
易に出た女難 結婚 四十年 古心
佳

西成に果喰う女難の 成れの果て 宵明
名士録 抜けて女難を語る日も 里風
運命を変える 悪女の片ゑくぼ 十止庵
この屏 開けたら 女にだまされる 扇水
二日酔女難の 香もまだ残し 笑風
ひき出しに入れてた女喋べり出す 葵水
人
新入社オールドミスにマークされ 国彦
地
幻の女難 お酒に酔うて寝る 肖二
天

お目出度い顔で 女難に 遠く居る 寛
軸
還暦の女難にやにや聞いてやり

青

大森 娛句案 選

信号の 青へトップを切った僕 里風
信号の 青傘傘の ターミナル 初甫
公害が無けりや 素適な青亨真 扇水
テイハツの 青さへ 仏様コビル 寛
青い海 ただ見るだけの 水着きて 眺明
掛軸が わずかに 揺れた青い風 宵明
都座から 若葉の青へ 濡れに行く どんたく
灯明へ 尼僧のおつむ青光り 魚山
湖の 青さへ 富士が 少し揺れ 笑風
青畳娘の 嫁ぐ日も 近くなり 章雅
青いのも 黒いのも いる子沢山 三十四
遙かなる 雲 青年の夢を 乗せ 一郎
ああ都会 花瓶に 活けた青い麦 無名
青空を 選せと 赤いアドバルン 酔々
青くも やつちが 向う意気に 負け 翁童
連休の 青葉 若葉に 疲れてき 静歩
青年の 澄んだ 瞳に見据えられ 露杖

青春は 二度とないから 臍を出し 一治
誤魔化せぬ 妻の 瞳 青い顔になり 思月
真青になるから 余計 疑われ 洋々
青い目の 人形も 飾るひな祭 木魚
宮島の 千畳敷の 青 嵐 伶人
連休が すれば 青空ヤツと 見せ 英子
失業の 身に 青空が 氣に入らず 止水
機帆船 青い 入江の 波を 切り 代仕男
青い空 だけでは 食えぬ 過疎の 村 城南
青空へ 愛の 矢車音を立て 千代香
青年の 夢 削られた 今日 の 地位 秀峰
お編路も 一息 入れる 青葉 蔭 眺風
佇めば 静まり 返る 池の 青 いわを
青年の 主張 満座の 胸を 衝く 軒太楼
佳

海の 青工場が 出来て 沖へ 逃げ 花子
継母に 馴染めない 子の 目が 青い バット
土一升 買って 団地 の 窓に 青 虎城
軍艦旗 吾が 青春を 賭けた 旗 素身郎
満天の 青 断ち 割った 飛行雲 白汀
人
海 青く 澄んで 邪心を よせつけず 七面山
地
青い 瞳の 箸も 国際的に 馴れ 千翁
天
黒潮の 黒さの なかに あった 青 古方
軸
青梅を ソツと ほしがる 初兆 候

初歩教室

— 題「左」 —

本田恵二朗

左利き同士が今日も飲む話

比呂路

一応まとまったように見えるが、句をもっと面白く楽しく表現したいよ。

(左利き同士がぼったり道で会い)

とすると、その後の状況は、どんなことになるか、読者のご想像にまかせとけばよい。

左党の父猪口で晩酌楽しそう

賛平

たった十七音字の中に、酒に関する語を三つも入れることは、句を殺してしまうよ。せいせい二つ位にして欲しい。

(晩酌にあずかり左党の父である)

自家用車左ハンドル社長用

生仏

(ハンドルが左にあって社長用)

左宮屋の方が新車で来てたき火

新之助

(左宮屋が新車乗りつ焚火する)

左宮、大工の日当は大したものだよ。

今もお左側通行こびりつき

静子

(左側通行の癖が明治にこびりつき)

左目よ悪く思うな鉄砲打ち

本蔭樺

座五が鉄砲打ちでなくても、色々変えることが出来る句だ。これを動く句と言う。

(左目よ悪く思うなファインダー)

(左目よ悪く思うな望遠鏡)

左利き器用なこっちゃと使われて

春海

(左利き器用な人ねと使われる)

左ばかり見ている筈だ美人居て

八郎

(左ばかり見てなるほど美女がいる)

政治その不信左翼根を抜け

花子

(政治不信左翼ジリジリ根をひろげ)

左打ち片足あげてホームラン

シゲ

(左打ち片足あげて王を真似)

社長の左利きを知った親近感

軒太楼

(社長さんもギッチョと知った親近感)

器用者左手右手のよう動き

双楽

(右で書き左でも書く育ちよう)

書類にも左書き文字多くなり

秀村

(左書き明治生れへなじめなり)

子沢山左うちわの夢ばかり

浊水

子沢山左うちわは夢の夢)

左手に指輪をはめて式終る

富士

結婚というお目出度いことには、終るとか去るなどの語は禁句とされていく。

(左手に指輪をはめてゴールイン)

我が家にも左派と右派とに別れおり 隼人

(左右両派が雑魚寝しているマイホーム)

外遊へ目的が別にある左党

保夫

色紙短冊
書画用品

大原政一

丹青堂

ちやんこ

(外遊へ別に目当てがある左党)

左遷ではないよと辞令手渡され

この調子でよいのだ。ご精進あれ。

割り切れぬ左遷の土地へ一人旅

左様でございませうと値踏みされ

サウスボー九回裏を守り抜き

政治ボス左の肩を持ってみる

親と子と左が利いてうまが合い

少々は左がかるうとわが息子

社内では三羽鳥の左利き

空き腹の時は左で食う娘

類想の無い句材をよくとらえているよ。

パンザイへ達磨左の目を開き

満津子

富喜子

誓二

頼次

翁童

葵水

万竿

万竿

弘生

利美

弘生

段々と進歩して来たようだ。たゆまず作句街道を歩き続けよう。

左利き両手で縫っておどろかせ 繁子

左翼かと老父は吐き出すように言い 進

左前それから競馬がこわくなり 茂美

左利きだけが知ってる水の味 綾女

なかなかうまいよ。だが隅に置けないぞ。

てこ入れの金も潰した左前 止水

左には左の夢の赤い旗 止水

なんば左前から塔は売られまい 静観堂

右手がマイクだから左で握手 静観堂

左指が光る客問の訪問着 孝華

左遷やと思えど口では祝うとき まさひろ

ボーリングまたも左の溝掃除 カズエ

左遷など辞せぬ気骨を見直され 迷朗

鳴かず飛ばさずあげくのはてに左遷され 敏

近 詠

和歌山市 秋月 宏方

風紋は命短かく生れつき

徳島で阿呆になって戻って来

▼六月号「川柳家の暦」宏方氏の出生日を六月二十九日と訂正します。

岐阜市 市川 鱈魚

干せるだけ干しても惜しい空のいろ

限りある命に花の美しさ

ギッチョですこの子の将来投手です 敏
和に飽きて左は叫ぶ革命歌 藤 持

×

趣味を同じくするということは一つのご縁

だと思ふ。川柳という趣味を介しての友好が

それである。殊に、この教室を接点として、

あなたと私とが毎月接触することは、正しく

うれしい奇縁だと思ふ。そして金銭では絶対

に買うことの出来ない歓喜でもある。

年齢も、顔や姿も知らないのに、ひしひし

とせまる親近感を私は抱きしめている。

教室の仲間が、どしどしと上達されること

を祈るだけではない。いつも健康であれ、そ

してご家業がいよいよ繁栄であれと祈ってい

る。健康で、家業盛大であることは、即ち潑

刺とした句が生れる源泉となるからである。

今治市 長野 文庫

檻に居て物乞う浅ましい王者

角ばった顔に易者が惚れてくれ

断りの口実にする易の本

出て怪我をしてはと家でテレビ番

小松市 山上 千太郎

真すぐな道しか見えぬおろかよし

政治の手届かぬ高さに物価い

肩書が次々しゃべる式次第

平穏なくらしそれも運のうち

熟睡をしたあとの爽快な脳味噌を、作句に用いるように心がけて頂きたい。それが一番健康的な作句法だと提唱する私である。

題一生——七月二十日締切（九月号発表）

宛先 岡山県倉敷市下津市三五二（〒七二一）

本田恵二朗

★

▼堺・若芽川柳会主催の史蹟探訪周遊吟行は七月四日午前十時半、泉北高速鉄道路泉ヶ丘駅集合。

会場は府立泉北考古資料館。岩崎暉館長のお話もあり、題は「埴輪・みどり・迷う・展望台」。

会費 二百円、

弁当持参、家族連れ歓迎。

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 三四五二一四

夜間 四四〇八

大萬川柳

「次の間」

入選発表

選者 川村好郎
 入選 六百五十四句
 選 五十七句

大阪 十止庵

次の間で下手な小唄にかしこまり

貝塚 つき子

次の間はないけどふたりだけの城

大阪 智子

次の間へ逃げてでも厭追ってくる

大阪 一三夫

次の間の襖も外す大安日

東大阪 弥生

敗北の身横たえている次の部屋

大阪 圭井堂

落ついて聞けば次の間父娘なり

松江 鶴丸

猿芝居承知で次の間で控え

堺 慶之助

カーテンで次の間子供の勉強部屋

堺 青香

呉越同舟次の間で待つ報導陣

神戸 牧人

次の間へ箒を立てて茶も替えず

和歌山 葵水

次の間のない建売りのすきま風
 兵庫 可住

次の間で二つに割れた妥協案
 今治 青女

陰悪な空気次の間唾を飲み
 大阪 柳志

耳打ちをされて次の間から戻り
 大阪 保夫

次の間で幹事お女将に喰い下り
 大洲 暁明

次の間を安心させた高笑い
 倉敷 春日

次の間のドンチャン騒ぐ負々飲み
 松原 迷朗

次の間もついてうれしい老の旅
 富田 花梢

次の間で茶室の膝をもみほぐす
 大阪 水客

次の間へ男の意地は置いてきた
 大阪 弘生

次の間の方が見合いに緊張し

著 栗

西尾 水

鶏 笛

送料共 650円

何を選んでいただくかは先様におねがいして
 タカシマヤの商品券を
 お贈りするのにも心に
 くい贈物かと存じます

1000円から
 10000円迄
 大阪・東京・京都
 3店に共通です



なんば 日本橋
 大阪・東京・京都

高島屋

大阪 一栄

次の間でポチの中味にご満悦

倉敷 翁童

居留守だろうと次の間に聞かせ

守口 笑風

次の間をついでに検証して帰り

大阪 三十四

次の間は莫長の娘出番待ち

大和郡山 カズエ

次の間へ洩れた話に尾ひれつき

大阪 柳宏子

次の間へ逃げた笑いのとまらない

大阪 文秋

次の間を隔て嫁への思いやり
 次の間へ寝床替えたらこも漏り

笠岡 遠二

密談に次の広間を開け放ち

大阪 水京

次の間はお隣りですというくら

米子 瑞枝

お色気で攻める気次の間に芸妓

大阪 形水

次の間も溢れ講義に熱を帯び

大阪 形水

次の間で病父の小康得た昼寝

大阪 形水

次の間にボデイガードが居る会議

大阪 形水

次の間へこらえこらえて来た涙
 次の間のミシンを小言と共に聞き

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生路郎七回忌川柳大会は別項記載の通り七月十一日(日)午後一時から御堂会館(南御堂)で開催される。柳縁につながる方々、遠近を問わず友人お誘い合わせの上多数ご出席を下さるようお願い申し上げます。

▼麻生路郎先生はめつきり白髪が増えられたがお元気にしておられる。西出一栄さんや吉岡美房氏の訪問を受けられたり、直原七面山氏から贈られた「岡山山の川柳」などの本に親しんだりやはり川柳から抜け切れないうご様子である。七十九才の由、いつまでもお元気でいて戴きたい思いで一ぱいです。

▼水郷川柳社創立四十周年記念第十五回愛媛県の川柳大会は八月八日(日)大洲

市三の丸大洲市民会館で開催される。兼題「竹・氷柱・猛烈・無鉄砲・正面・転ぶ・はみ出る・これは古い。各題三句、投句は横四種、縦十八種の句箋を使用、裏面に題、雅号を明記、投句料百円封入の上、八月三日までに大洲市常磐町、米沢・天明宛送付のこと。

▼川柳はつかり吟社百号記念川柳大会は九月十九日(日)午前十時から盛岡駅前、盛鉄もおりお荘で開催。投句は雑詠各二句を選者別に投句料百円と共に盛岡市加賀野四丁目三の五川柳はつかり吟社宛。選者は、白石朝太郎・大野風柳・坂本雨山・高橋放浪児・藤沢岳豊の五氏。

▼第十五回岩手県川柳大会は六月二十日(日)午前十

時から北上市常盤台の北上市民会館で開催、山路星文洞氏(東京都)が大会選者として出席された。

▼関西川柳作家懇話会一九七一年みどりのつどいは、五月十六日午前十時半集合で京都右京区くつかの、「一茶」で開催。

▼奈良県川柳会四十回記念川柳大会は五月十六日(日)午前十時から橿原公苑宿泊所で開催。

▼かがみ川柳社(岡山県)八月句会とは奥津温泉へ吟行、二日午前十時からマス釣場で開かれる。兼題「マス・新居・風・レジャー」。会費実費五百円。

▼「岡山山の川柳」発刊。弓削川柳社の編集で日本文芸出版社が発刊する「岡山山の川柳」は四月下旬に発刊された。百八十頁のうちに約九十頁が写真で岡山の川柳界を興味深く紹介してある。会員制で市販はされていない。定価四百円、送料五十円。申し込みは、岡山県久米郡久米南町弓削川柳社へ。

▼川柳やまぐち誌五月号での柳誌月評で中村光影子氏が川柳塔四月号をとりあげて巻頭の大坂形水氏の句、手を握り返してきそう握ってやる

には近來にない感銘を覚え、内藤きさ子、平田実男諸氏の句も引用、温い評を頂戴した。

▼川柳研究社の編集部が東京都足立区梅田三丁目七の一五川柳研究社内に移転。

▼川柳えんぴつ社の同人総会が四月十八日開かれ、会費の値上げ(六ヵ月六百元)と新役員の選任を決議した。会長「木村喜見城、会長補佐「西田自然、副会長「中村与志、津田三郎。

▼大陸川柳作家同窓会(既報)は七月三日正午から金沢市下本多町五番二四四号の「けいさく会館」で開催。題「歓喜仏・三十八度線・天津栗・妓生・ウオッカ・城壁、各二句。連絡先は姫路市北条二五〇一六七〇大井正夫宛。

▼第十四回近県川柳大会・山内静水国鉄退職記念の会

(竹原市)は九月五日(日)午前九時から三井会館で開催される。兼題「髭・壁・貝・土台・泣き虫・石・嫁・鎗・面影、各題二句。投句は、縦二種、横四種の句箋に明記(裏には雅号)投句料二十円切手十枚封入の上、竹原市竹原町中山内静水宛。

▼第十七回愛媛川柳研究大会は映月句碑建立記念を兼ねて五月十六日開催。

▼川柳たましま五月句会は、九日玉島公民館で。

▼川柳あしなみ(姫路市)瓜生羅漢吟行は五月九日開催、以上三句会から楽しい寄書を拝受。

▼奈良県柳人との交歓吟行句会は六月二十日午前十時東福寺本堂集合で開催された。主催平安川柳社。

▼三菱化成水島川柳五周年記念大会が六月十三日(日)正午から化成会館階上広間で開催。松村万古、水粉千翁氏らが兼題の選をされた。

▼北川春果氏(枚方市・参事)は「くすり春秋」五月

号に「川柳を心の友に」を執筆。大阪市立桃谷病院院長・同市立桃山市民病院院長としての「忙中閑あり」の好読物。なお六月五日の大阪市幹部クラス職員の仕事異動で、環境保健局環境部長兼市立高等看護学院院长、市立助産婦学院院长に就任された。

▼西尾葉氏（八尾市同人）は五月十三日伊丹空港発、香港・マカオへ。「機内食まごめいたものも出る」

▼河村日満氏（鳥取市同人）から、「昨秋の私の選挙以来、二月には市長選、四月の統一地方選、そして六月の参院選と忙しく、それに市の監査という役までついて定年退職後の方が眼の

回るようなことになりました。その上、妻の入院、家の造作などで輪に輪をかけた多忙です」

新 同 人 紹 介

大 矢 十 郎

— 葵水・太茂津— 推薦

○みつむ ゆけむり
嬉しきみと僕

の句をものせられた。それに最近リスの子が二匹生まれて、手紙を書く便箋の上まで歩き回り邪魔をして困る由。

▼垂井葵水氏（和歌山市同人）夫妻と野村太茂津氏は（和歌山市同人）五月十九日新宮市を訪問、柳人小山峻氏経営のつり堀で釣り上げたハマチで盃を傾け「新宮不老会」に出席、翌日青葉と山つつしの瀬を遊覧されたが、国鉄のストに出会った和歌山県の端から端までタクシーを利用する破目となってしまう由。

▼羽原静歩氏（守口同人）は五月九日岡山県護国神社の献句祭に参加、久米雄氏に過日の句碑除幕式の不参を詫び、訪米観光の映画と句会を楽しみ、五時過ぎから大森風来子氏の案内で後楽園を見物された。―後楽園浮世ばなれの風が吹き―また、五月十六日は今治

の愛媛川柳研究大会に参加。今治は第二の故郷と大変なつかしく、月原宵明、長野文庫、片山巷雨、山内静水の諸氏と交歓された。―汐風へ集う瞳の朝が明け―

▼山田季賛氏（高槻市同人）は五月二十八日夜行で広島へ。石原伯峯、竹野寛水氏と会談後、広島新幹線工事で打合せ、現場見学をして古果の海田市自動車営業所、広島地方資料館を訪問旧友と交歓後宮島へ。三十日は厳島神社参拝、岩国錦帯橋、岩国城、今津の白蛇棲息地を見学、一路帰阪された。―白蛇の赤い目観光に役立っている

▼堀江芳子さん（島根県）は五月二十日に退院―これで正朗を路郎忌に出席させるメドがつかしました―と。

十一歳。（近畿民俗会会長、日本民俗学会理事、大阪府文化財専門委員）
▼南海川柳会。7月15日六時から。兼題「瞬間・バス停・野暮。ナンバ高架下、親和クラブ」。

▼南大阪川柳会。7月20日（火）六時から。題「愛・話題・サービス・地図。松崎町二丁目、以和貴荘」。

できたての生ビール
アサヒビール本生
レーベルの日付けは新鮮なうましのしるしです

川柳家の暦

(七月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった労作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。

(編集部)

遺稿 清水白柳

1日	石倉旅風	M33	庚子	奈良
1日	独り旅夕陽に西を教えられ			
1日	逸見灯竿	M35	壬寅	岡山
1日	出勤時に鉛筆を削られ			
1日	越中今雨	M41	戊申	堺
1日	口笛を鳴るようになり夏休み			
1日	宮脇砂丘	M42	己酉	高知
1日	横道へそれぞれ故郷へ便り書き			
2日	中島生々庵	M31	戊戌	大阪
2日	浮き草は浮き草なりに花が咲き			
2日	仲どんたく	M43	庚戌	神戸
2日	帯締める音できまつた立姿			
2日	吉居奈々	T12	癸亥	大阪
3日	共嫁き月へ洗濯ものを干し			
3日	北村三歩	T14	乙丑	鳥取
4日	好きや好きやの一本槍でもろた妻			
4日	羽佐間柳葉	M24	辛卯	ハワイ
5日	責任を持たぬ下ッ端より喋り			
5日	伊藤瑶天	M33	庚子	東京
5日	氷割る音へ始発の軋る音			
5日	深田白扇	M45	壬子	新潟
5日	子の記憶ひよいと真顔で箸を置き			
5日	足立春雄	M45	壬子	徳島
6日	薬瓶下げてマムシの香師に立ち			
6日	出口夢詩郎	M26	癸巳	北九州

6日	母のしたとおりのついたち十五日			
6日	佐藤正敏	T2	癸丑	東京
7日	許せない眼となり暫しもの云わず			
7日	吉田隆史	M33	庚子	神戸
7日	御勘定となつて無欲でないマダム			
7日	池田翠柳	T7	戊午	高知
8日	嫁がして世帯が母の手に戻り			
8日	一本の筆あればよし自由の身			
8日	榎木枯夢庵	T9	庚申	神戸
8日	潮騒に愛語の語尾が聞きとれず			
8日	橋本幸男	S3	戊辰	西宮
9日	汽車の窓昔住んでた村も見え			
9日	小林文月	M29	丙申	鳥取
9日	卒業は自己の努力とのみ思い			
9日	市場没食子	M34	辛丑	大阪
10日	妻に客あつた末の子と風呂へ行く			
10日	上田翠光	T5	丙辰	奈良
11日	投書してやらかと腹の立つ日なり			
11日	橘高薫風	T15	丙寅	大阪
12日	牛の背で笛吹く恋がしたし			
12日	太田良子	T12	癸亥	大阪
12日	こんなのが夫婦やらかと淋しがり			
12日	上野十七八	M33	庚子	北九州
12日	独り茶をすすり人たるむつかしさ			

15日	竹中肖二	M38	乙巳	東大阪
15日	温泉の宿の膳を老妻偵ぶみする			
15日	谷口光穂	T4	乙卯	伊丹
16日	似顔絵師わが憂愁を描き得ず			
16日	石井伯峯	T9	庚申	広島
16日	我が墓碑に無名の酒徒を刻むべし			
16日	土守靖鈴	M26	癸巳	滋賀
18日	夫婦著今だに妻が出して呉れ			
18日	富岡淡舟	M44	辛亥	枚方
19日	子沢山父につく子と母と子と			
19日	長谷川三司	M28	乙未	尼崎
20日	水うまし老後を頼る子とてなく			
20日	木村水洞	T3	甲寅	大阪
20日	アルコル切れると養子に成くなり			
20日	中村二恵	M41	戊申	東京
22日	垂井葵水	T10	辛酉	和歌山
22日	海老むいた指へ盃持たされる			
22日	脇本政己	T15	丙寅	竹原
23日	子の居ない夫婦に風呂がわきすぎる			
23日	中村九呂平	M40	丁未	下関
26日	人間の価値を知る日の釣静か			
26日	福井一浪	S11	丙子	名古屋
27日	ネクタイをはどいて妻の手に帰る			
28日	山路星文洞	M28	乙未	東京
28日	青空へ向いて悔なき汗を拭き			
28日	酒井塵声	M32	己亥	広島
28日	伊勢の旅赤福に座す緋毛せん			
29日	清水桂太楼	T6	丁巳	大阪
30日	東京の女に鮎はいたわられ			
30日	鍛冶本童心	M41	戊申	石川
30日	神田仙之助	T4	乙卯	東京
30日	日曜日父予もろとも叱られる			

傍若無人マイカー止めてある湖畔
の隣りはストに関係ないクルマ
運転が女レスタカールとは見えず
マイカーで故郷の春を追い馳ける
免許取り立てマイカー白状して走り
金策に走るマイカーとはなりぬ
マイカーが帰って我が家飯となり
マイカーはないけど欲しい分譲地
母のせてマイカー制限時速なり
マイカーのご利益禁酒に踏切らせ
マイカーの愚痴は車が多すぎる
マイカーの迎えを待っているベンチ
マイカーで劣等感を捨てにくく
下取りもきかぬ愛車にある未練
酔い醒ますマイカー窓の星明り
マイカーを置いて来たのに酒が出ず
マイカーの心の人の名を付ける
マイカーのキーポケットにある重み
マイカーで来るなど同意会通知

兼題「小銭」
橘高 薫風選

あるだけの小銭を見せてまげさせる
ハッと気がつけば小銭の方が無事
旅カバン小銭の用意も出来ました
小銭では済まぬ招待状が入る
博文はんなんぞは小銭の中に入れて
銀行へ神さん小銭をとっと出し
十円玉に替えて末っ子嬉しそう
小銭でも貯まればあてにする暮し
小銭容れ掘られた阿呆掬う阿呆
小銭今日子供銀行で数えられ
恋人とおなじ小銭入れを買う
夜の茶の間小銭を賭けて熱が入り
小銭ならありませう僕が切符買う
小銭ちゃらちや祭り雑子を追つか

万笑的天
百園酒
小松園
好一郎
柳信一
榎馬
静留子
頂久子
維客
水客
滋雀
君子郎
好郎
緑水
葵水
花梢
本蔭棒
一栄
扇水
どんたく
牧人
緑路
野迷舟
一肖二
鬼遊
天笑

橘高薰風選

地下鉄電車タクシーと小銭あなどき
小銭少々旅のバチンコ屋で負ける
小銭だけ妻が払って妻のもの
昨夜の癖かいがあり夕刊をかう小銭
引出しの一円不意の役に立ち
小銭まできっちり払うてもう来ぬ気
番台へ小銭並べる女風呂
一円を拾った自分褒めてゐる
野菜高百円小銭なみとなり
賽銭はあげんが小銭川へ投げ
バス乗った時から小銭握りしめ
小銭入千円小さく仲間入り
百円玉お賽銭にはチト惜しく
運命を決める小銭が裏返る
ワンマンカー人の小銭を指図する
小銭ばかり集まる日なり売れてい
満員のバスが小銭でもめてい
十円を借りて賽銭上げたけど
ポケットの小銭で足りる昼の飯
小銭入れはたいてこけし連れ帰る
妻の留守こんな所にある小銭
旅帰り何国の小銭か覚えて来
一円のアルミ貨子供でふみ
人生の縮図小銭は知って居り
子宝を抱いて小銭の音がする
ジョッキ追加小銭が邪魔な使いよう
割勘へ女財布をぶつちやける
ポケットに小銭クラブを振る男
俺に似て小銭を貯める妻でなし
小銭だけ持っているのをなお案じ
小銭は小銭の知らない人に自動ドア
舌打ちの艶は陽焼けの肌似る
十円足袋の方が小銭を粗末にし
葉萬宣葵新茂柳一百文一千多
雀介水美之助信酒秋舟文子松久
葵萬宣葵新茂柳一百文一千多

兼題「実家」

傍島

静馬選

実家では気兼ねない国なまり
兄嫁が来てから醤油も味噌も買
玉の奥実家のことに触れられる
実家もう忘れるほどの夫婦仲
帰るたびおめでたまたか千里の親
ぐんぐん実家持ち出す嫁落ちつ
こんなとき妻には帰る家があ
久々に実家で母と裸かけ
兄嫁が来てから実家遠くなり
泣きに行く実家のあるをうらま
今度こそ別れる積りで来た実家
妻実家訪えば何かを持ち帰り
落ちふれたとはいえ実家は元華族
へそくりを実家で借りたと言出し
三日実家でしゃべってきいた機嫌
昼寝する気ままの部屋があった
物持ちの良さを実家で見て帰
電話では言えず実家へ馳け付
実家にまだ母の匂いのする畳
里帰り来たか父のそっけない
妻の知恵実家の知恵と見抜かれ
実家からおみやげみんな重いの
家出して実家の敷居またがれず
久し振りに実家の風呂で虫の
重文になりそな実家の葺の屋根
土地ブーム実家農地で大儲け
イソイソと初孫抱いて実家帰
実家とは違ふ家風で戸惑わせ
抜擢の蔭に実家の七光り
夫婦して稼げと実家少し出し
元部下も実家のように来て泊
実家から仕送り学生夫婦です
まっ先に犬が飛びつく里帰り
良縁がちよいちよい実家へ泣
真紗子 主井堂 どんたく 一三夫 生々庵 綾女 誓二 好三郎 庸雅 章雅 多志 敏子 花梢 鬼遊 天笑 小松園 柳志 庸佑 敏子 維久 双舟 徹舟 双舟 肖秋 文志 多郎 好三郎 宣四 静馬

兼題「転職」

正本

水客選

転職にやつと馴染めば社がつぶれ
長髪をとりやあつさり転職し
転職をコンピュータがはじ出し
転職の利く健康をうらやまれ
転職へ月賦の伝票ついでくる
転職もマサラーにふれただけ
転職も胸張ってみる定退日
転職に汚職いよいよ遠くなる
医者が言うので転職の氣に変わり
転職と言わずスカウトされました
転職の夫寝返りするばかり
ききこみは転々と職をかえ家をか
転職に今度は妻も口を入
若い娘に囲まれ転職若返
運転免許取ったらサツサと他社へ行
ペンダコの指転職をもてあます
転職をしたばかりを交通禍
転職の不安は横に書く履歴
シャリコウベAからBに職をかえ
転職の父今夜は酔うてはる
転職に大物らしく迎えられる
パイタリティ過剰で職が定まらず
転職は一人ですと辞表出し
たこ焼屋でもやりますと辞表出し
正業へ転職呼び名改まり
転職の最後は美女子ペンに生き
転職もそのままでよい定期券
転職を例まであげて止められる
転職に使い古しのボールペン
退職金のない気やすさの職変える
水客 一三夫 柳風 喜四 一三夫 迷朗 蕉風 水客



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。結切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

八尾菜の花句会

飯田一治報

岩くぐった金魚の視野を追うて見る 千歩
 言ひ訳へ心の裏をのぞかれる 一栄
 裏道に通れて世間をやり過し 飛鳥
 悲喜につき思うは故郷山河なり 竜鬼
 淡彩画谿の流れを聞く如し 肖二
 馬あわせその弱腰を蹴飛ばされ 連治
 岩を割るハッパの音が上げる地価 弥生
 伝説の岩縄張って寄せつけず 柳宏子
 一切の邪念を捨てた岩場の瞳 雅児
 雅児澄み切った瞳の奥にある未来 儀一
 岩かけに寄れば先着二人連れ 力秋
 岩肌の汚れを知らぬカニが這い 文松
 素通りもならず裏から押んとき 小松園
 突放す言葉の裏に気がつかず 形水
 裏木戸をあけるサイン忘れてた 綾子
 繁華街裏は十時で寝しずまり 笑痴
 澄んでいる瞳信じる母が待つ 綾女
 磨崖仏風化山河にある歴史 吉々
 岩風呂でばったり野猿の親子づれ 酔産

馬の脚同土奈落にある話 凡九郎
 着外の馬にも櫛をかけてやり 鶴翠
 少年の澄んだ眼がまともに来 葉二
 いちこらびわへと初夏の味を追う 誓水
 澄んだ目野心一枚ずつはがれ 静馬
 澄んだ瞳に添乳の若妻見つめられ 水鶴
 酔い醒めて澄ました顔で察を出る 美声
 いちこ血つぶして愚問に目をそらす 凡路
 久々の帰省へ川は同じ音 鬼代
 山河枯れ人の情も何処へやら 史好
 聖戦を信じ山河を駆けた傷 好史

南大阪川柳会 金井文秋報

魚つりをしている方があくびする 圭井堂
 孫と遊ぶ母に勝氣の影もなし あいき
 スト妥結幹部気休め云いに来る 金三郎
 走るより外なし妻のムチが鳴る 好郎
 マスコミのネタ先生の出来心 儀一的
 出来心ですよと他人の子をかばい 万儀
 人間の証拠神話にある笑い 千一
 本人は勝氣が邪魔してるとは知らず 醉々
 気休めの融資を役所恩に着せ 一舟
 思いきり派手に葬式出して詫び 新之助
 あくび出そうで前列へ出ない出来心 文秋
 ひと枝を誰も見てない出来心 滋雀
 三っ程肩を叩いて理髪屋 柳志
 出来心にしては答弁出来すぎる 柳宏子
 仁王さんあくびしたから花ぐもり 水京
 衝動を制服ぐつとおさえつけ 綾女
 気休めの無縁仏も掃除する 一治
 可愛い悪魔にされて少女の出来心 智子
 も一人の私が勝氣な真似をする 智子

その学校にいるさかいと云う制服さ 凡九郎
 つまりは弱氣それだから勝氣 古方
 税金が気休め程度安くなり 肖二
 気休めに医師を替えたら合うと見え 誓二
 待望の子の制服に胸つまる 喜風
 勝氣でも寝顔しおらしくに見え 鶴翠
 おこつて証拠ゆびささふるえてる 好一
 俺の他パトロン有ると知るライター 水鶴
 ハンガール制服かけている生活 静馬
 桜の頃お招きしますとそのまんま 八郎
 勝氣な娘涙を見せる術も識り 章雅
 下に下あると悟って気を休め 高松

(前月分)

ビジョンより今日の稼ぎを確かめる 滋雀
 底抜けの陽気は恋を捨ててから 小松園
 お見合に懲りたを誘う策を練り 新之助
 五月晴れ無口も歌い出す陽気 君子
 ふるりの自慢へ声がはずんで来 金三
 余裕ない暮しへ遠慮して誘い 文秋
 タンポポを吹いて陽氣と話す 千子
 養老院自慢話に日を送り 双楽
 自慢の鼻折るたくらみへ知恵貰 綾女
 失意の瞳ビジョンは黒く消されて 柳宏子
 ビジョンの中に現在の私が居ない あいき
 夕焼小焼泥んこの足拭いてやり 智子
 さつき朝顔菊と自慢を店に出し 圭井堂
 花束へ握手だけして名も聞かず 儀一
 ビジョンだけ聞けば住みよい国に 柳志
 ボロかくし出来なくなつて来た陽氣 恒明
 勇退の花束涙の手に溢れ 好郎

蔵の窓に票透かす手暗かり
 世代には亭主関白も弱くなり
 弱さもつ女核心ふれさせず
 常連の弱さにも知っている女将
 はれた弱身いつもあなたと使われる
 農業にたよる心を捨てきれず
 農業でおどす女のわるだくみ
 農業をまかれて虫のあわてよう
 農業の効き目に酔うた米づくり
 農業をのがれデパートで虫が鳴き
 昆虫も農業規制にうれし顔
 農業がメダカとりし川うばい
 道義地に堕ちたとバタ屋まであきれ
 それからが呆れる程の運がつき
 別宅では猫もあきれほどよく働き
 あきれる無口と知らぬめでねだり
 ウイロー社（ハワイ）
 手をたたく調子へ孫の二歩三歩
 道問えば近所ですよと歩かされ
 要するに五十歩百歩と負けとらず
 老婆よ歩調の合わぬ日もありし
 茶話は妻と歩んだ嶮の道
 月面を歩いたような顔もせず
 黙々と歩けば犬もついて来る
 たのもしや独立をした子の歩み
 歩くのもピーケフルと孫も言う
 坂道を五十年遂に功成らず
 歩かせて寝かせて退院近くなり
 健かさまだまだ徒歩が証明し
 觀光で歩く覚悟の靴を買い
 立て歩めヒッピーになれと誰が言ふ
 浮草

ワイロー社 (ハワイ)

只一人都塵をよそに歩く宵 曉舟

南海川柳會(大阪市) 辻 圭水報

万博で農協世界に紹介し 清涼

横車押す集団は雑魚モロコ 柳 信

思い出は集団疎開の寺あり 貴山

集団になって悪事の華芽はえ 和郎

集団の暴力自動車まで燃し 摩天郎

集団の旅喰べてしゃべって帰って来 宏子

集団就職寄れば待たる祭り笛 一二三

集団就職一人消え二人消え 金三

こまつ柳壇 千太郎報

漫才のネタを地でゆく夫婦中 太路

生まじめな顔で漫才口喧嘩 革刃

楽屋では叩いた方がペコペコし 勝恵

漫才のような夫婦で睦まじい きみ子

裏話知っているので驚ろかず 佐一郎

人生の裏で生きぬく紅を引き 秀哉

栄転の裏に内助の功があり 久代

裏庭に記念日祝う五葉松 佐和子

民宿も混んで俗化の裏日本 弘実

チラシの裏でメモ取る電話口 富美子

どん底にいて裏町の人間味 城南子

裏道を歩けばのどかな花日和 信子

外観も裏から見れば四苦八苦 魚山

裏方も引張り出される総決起 栄次郎

裏の裏読み合っている選挙戦 瓢月

裏通り酔客誘う赤提灯 吉枝

内申書裏口の戸をノックする 波佐尾

遠足の明日へも一度下駄をけり 芳朗

川柳わかやま(新宮吟行) 垂井葵水報

神棚にのれん供えて法事する 太茂津

釣堀で釣って来たとは言わぬ魚籠 陽一

釣堀の糸へ商魂くくりつけ 岐 十郎

七光りも合せてのれん貰いうけ 久 司

釣り堀で紅一点のつり天狗 太平

研ぐ手間をはぶく庖丁ステンレス 翠楊

決断は遠出ときめた恋のカー 豊一

のれん分けた横柄がよく売れる 千寿子

つり堀のボスらしいのに糸切れられ 葵水

遠出して湖底の郷を懐かしみ 久美

遠出した草の匂いを持ちかえり 醉々

遠出して来た人らしい国なまり 裕美

遠出して帰りが遅く待つ家族 福松

誘い出す遠出なやらありそう 増蔵

最大の遠出は月の砂を踏む 智

地図ひろげ遠出の旅を追いかける ふみよ

決算書いま上げ潮に乗る社運 四坊

潮騒が寝かせてくれぬ釣の宿 守夫

潮騒が寝かしの恋を語りかけ 延伊知

大物の死や大潮の引く如く 一光

黒潮へ沈む陽を見に宿の下駄 弘生

潮どきを違えて馬手貝生捕られ 佐一郎

明るさの農家のくりやステンレス 葵水

武者人形兜の星はステンレス 葵水

たけはら川柳會 森井善居報

税務署に男盛りをおだてられ 扇水

味噌汁の味でも女評価され 西合

河豚料理かわりもなし病みつけ 季賛

家具すこし古びて妻の座板につき 五湖

榎本聰夢句集

“山の灯” 発刊記念川柳大会

とき 昭和46年8月22日(日)正午開場

ところ 堺市民会館大集会室

堺市翁橋町2丁1の1

電話 1481番

記念講演
あいさつ
川端直正氏

近江砂人

訓示
岡つとむ氏

社長
田中桂太氏

数字
磯野いさむ氏

強
西村久良氏

知
青木三郎氏

愛
鈴木俊作氏

山
古下萬作氏

燈
金口萬作氏

遠
堀口萬作氏

い
平賀紅寿氏

各題2句 締切 午後1時

会費 1000円

(含句集、記念品、大会誌)

懇親宴 1000円

申込先 下 590 堺市櫛屋町東1丁2の2

主催 堺市柳會

後援 傘川柳社

「現代南画の描き方」

定価 二千円

川柳塔社創刊号から毎月表紙に麗筆を賜っており、直原玉青画伯このたび標記の著書を発行されました。これは先年ご発刊になり大好評を博された「新しい南画と俳画の描き方」の姉妹版であります。

(生々庵)

若本多久志著

「親ごころ・子心」

送料共 二八〇円

「老いの坂」

送料共 五六〇円

後藤梅志著

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料共 六〇〇円

九月号発表表(7月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

近作柳村(10句) 川村 好郎 選

課題吟(各題5句以内)

「手相」 吉田 圭井堂 選

「なつメロ」 麻生 アート 選

「茶柱」 佐野 ト占 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十月号発表表(8月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

近作柳村(10句) 川村 好郎 選

課題吟(各題5句以内)

「奇術」 村田 瓢太 選

「黙否権」 小林 孤呂二 選

「ビジョン」 森田 茗人 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

清水白柳遺句集刊行句会

8月7日6時・以和荘在

柳ノ救急車	話ト車	中島 生々庵
		西田柳宏子選
		八木摩天郎選
		菊沢小松園選
		西尾 葉選

白柳遺句集7月中旬送本予定

定価 百八十円(送料六円)

半年分 千百円(送料共)

一年分 二千百六十円(送料共)

昭和四十六年六月二十五日印刷
昭和四十六年七月一日発行

大阪府南区鶴谷仲之町一〇番地

編集者 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪府南区鶴谷仲之町一〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三三八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

高級洋菓子

プロス

堺市役所前	TEL 21-2334
北野田支店	TEL 36-4215
中モズダイエー支店	TEL 59-3811 (内線338)

・ペンペン草・

★路郎忌の大会委員長多志氏と、清水白柳道句集刊行委員長某氏は、今のところ大わらわである。文字とおりの汗みどろというところ。

「文学」的ニュアンスがあったようだ。

★麻生を「あさぶ」と読んでいた。路郎先生は、それを氣にされてか、活字によくルビをふられたものだった。ボクが校正するときは「麻」に「あそ」と打ったが、先生は麻と生の空間に「そ」を打たれた。空間にルビはヘンだとするボクに先生は何もおっしゃらなかった。

★今月の兼題「幸」はご本名の「幸二郎」から拝借したものが、なぜ「幸」を題にしたのかと、若い人からたずねられたので、ここでお答えしておく。

★「品位を傷つける号は川柳の冒とくた」路郎先生談。「なるべく本名のほうがよい」水府先生談。を、フト思いました。

郎先生
石のほう
を、

▼編集室に入るやイナヤ「暑いなア」と、絞れるぐらいの汗のシャツを窓の風にさらす。これが夏の間の不二田様の毎日です。あまり汗の出ない私には、始めの頃、別の世界の人のように映りました。そして夏のたが食欲が進み、よくお太りになるのも、夏やせのする私には不思議の一つです。

——葉子

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミン®A

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ
☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



タケタ

36



BABY CARE / 手のかからないせんい

東レ デイトロン
レイソニックコート

東レ株式会社



★朝日 テレビに「モーニングジャングル」の番組の「草」を演じているうな。月／金の朝六

時五十分というところ、ちょうどボクの眠るころなので見たことがない。だが「ペーベン草」という芸名になにかひかされるものがあるのだ。ボクの場合は、ペンをひっかけたのだが、このタレントは、ボーイフレンドがなに気なくつけた芸名をそのまま使っているのだそうである。くやしいが先方さんは三年前からこの芸名を使っているそうで、本家はアチラということになる。

★二十年もおつきあいねがっている人が、ボクのことを「二三夫ーふみお」とよぶ。しかし「二三夫ーいさ

お」ですと、まだ訂正をしてもらったことがない。
★ボクと同音の歌謡歌手がいた。川柳仲間のある女流作家が、その歌い手の後援会にはいったそうだが、すぐ消えてしまった。
★路郎先生は、よく生々庵主幹には「中島ハン」ボクには「不二田ケン」と、ほとんど苗字でよんでおられた。蔑乃先生は「中島先生」ボクには「不二田サン」だった。
★暑中広告、お礼申しあげます。(不二田一三夫)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十六年六月二十五日 印刷
昭和四十六年七月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷五三〇号

川柳塔

七月号

定價 百八十円
(送料六円)

黒潮躍る



紀州路へ

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに6号…(毎日)…12時50分発

急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発

＜白浜・新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時15分發

●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の
列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社

(641) 8686 (311) 5038

南海電鉄

VIVA・〈純生〉!

いのち
生命を燃やす男達にウケて、
爽快無比の《純生》が冴える。

サントリー〈純生〉

いよいよ〈純生〉のシーズン到来。

